

一般国道9号松江道路建設予定地内

埋蔵文化財発掘調査報告書IX

(勝 負 遺 跡)

1992年3月

建設省松江国道工事事務所
島根県教育委員会

序

建設省松江国道工事事務所においては、松江地区の一般国道9号の交通混雑を緩和して円滑な交通を確保し地域社会の発展に資するため、一般国道9号のバイパスとして松江道路の建設を進めています。

道路整備に際しては、埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ関係機関と協議しながら計画していますが、避けることのできない文化財については、道路事業者の負担によって必要な調査を実施し、記録保存を行っています。

当松江道路においても、道路予定地内にある埋蔵文化財について島根県教育委員会と協議し、同委員会のご協力のもとに昭和50年度以降現在まで5億円の費用を投じ発掘調査を実施しております。

本報告は、平成元年度に実施した勝負遺跡調査の結果をとりまとめたものであります。本書が郷土の埋蔵文化財に関する貴重な資料として、学術ならびに教育のために広く活用されることを期待すると共に、道路事業が埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ進められることへのご理解を頂きたいと思うものであります。

最後に、今回の発掘調査及び本書の編集にあたり、ご指導ご協力頂いた島根県教育委員会ならびに関係各位に対し深甚なる謝意を表するものであります。

平成4年3月

建設省中国地方建設局松江国道工事事務所長

神 長 耕 二

序

島根県教育委員会では建設省中国地方建設局の委託を受けて、平成元年度に一般国道9号松江道路建設予定地内に所在する勝負遺跡の発掘調査を実施しました。

松江道路に係る調査は、昭和50年度から昭和57年度にかけて、現在供用されている2車線部分の調査を行い、昭和61年度からは車線拡張に伴う部分の調査を実施しております。平成元年度の調査区は昭和55年度調査区の隣接地にあたり、弥生時代から古墳時代にかけての住居跡を検出しました。島根県内においても、これだけ長期にわたる集落の継続が確認された例は少なく、当時の集落の様子を知る上で貴重な資料となるものであります。

本報告は、発掘調査の結果をまとめたものでありますが、広く各方面においてご活用いただき、多少なりとも埋蔵文化財に対する理解と関心を高めることができれば幸いです。

なお、調査にあたり建設省松江国道工事事務所をはじめ関係者各位から暖かいご理解、ご協力を賜りましたことに対しまして心から感謝申し上げます。

平成4年3月

島根県教育委員会

教育長 坂本和男

例　　言

1. 本書は建設省中国地方建設局の委託を受けて、島根県教育委員会が平成元年度に実施した一般国道9号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の報告である。

2. 平成元年度は、勝負遺跡の発掘調査を実施し、発掘地は次のとおりである。

勝負遺跡　島根県松江市東津田町字南外2142-6，他

3. 調査組織は次のとおりである。

事務局　泉　恒雄（文化課課長），井原　謙（同課長補佐），勝部　昭（同課長補佐），野村純一（文化係長），吾郷朋之（文化係主事），別所重一郎（島根県教育文化財団嘱託）

調査員　ト部吉博（埋蔵文化財第三係長），広江耕史（文化課主事），藤井和久（同教諭兼主事），三島正司（同臨職）

調査指導者　山本　清（島根県文化財保護審議会委員），田中義昭（島根大学法文学部教授），高橋　護（岡山県立博物館学芸課長），斎藤　努（国立歴史民族博物館情報資料研究部助手）

遺物整理　三島千富美，高角恭子，植田陽子，菅井国江，松山智弘，馬場志津子，津森眞弓

4. 本書で使用した遺構略号は次のとおりである。

SD-溝，SI-竪穴式住居，SK-土壙，P-ピット

5. 本書で使用した方位は磁北を示す。

6. 本書の執筆，編集は調査員が討議してこれを行い文責は目次に表記した。

7. 本書に掲載した「遺跡位置図」は建設省国土地理院発行のものを使用し、「調査区配置図」は建設省松江国道工事事務所作成のものを淨書して使用した。

8. 本遺跡出土遺物及び実測図，写真は島根県教育委員会で保管している。

目 次

I 位置と環境	(藤井)	1
II 調査に至る経緯	(藤井)	3
III 調査の経過	(藤井)	3
IV 遺跡の概要	(藤井、広江)	4
V 小 結	(広江)	51

I 位 置 と 環 境

勝負遺跡は、松江市市街地の東部、松江市東津田町字南外に所在する集落遺跡である。佐草の丘陵部に源を発する馬橋川の沖積地の南側の丘陵部に立地している。この地区的隣接地には出雲地方でも有数な穀倉地帯として名高い意宇平野が広がる。

このような地理的環境を持つ本遺跡周辺は、意宇平野を中心として現在でも古代の要衝として栄えた面影をまのあたりにすることができる。

勝負遺跡の周辺では縄文時代の遺跡として石台遺跡と保地遺跡が知られている。前者からは晩期の粗痕のある土器片等、後者からは後期と思われる土器片が出土している。

弥生時代に入ると台地上や丘陵斜面に多くの集落跡が営まれていたと考えられ、勝負遺跡をはじめ、隣接する石台遺跡や平所遺跡において堅穴住居跡が検出されている。この地にも、古志原遺跡で弥生時代と思われる石器が採集されている。また、墳墓をみると後期に属する四隅突出型の米美墳丘墓や間内越墳丘墓などが現れる。

古墳時代になると、集落として、タルミⅣ遺跡、舟津田遺跡が点在している。中期に入ると大橋川流域を中心とする丘陵上に、出雲地方を代表する大形古墳が多く出現する。代表的な古墳としては、茶臼山の西方山麓の大庭鶴塚（方墳、一辺約42m）、大橋川沿いの手間古墳（前方後円墳、全長約70m）、井ノ奥4号墳（前方後円墳、全長約57m）などが挙げられる。後期になると茶臼山山麓の山代二子塚（前方後方墳、全長92m）、意宇平野西側の岡田山古墳（前方後方墳、全長24m、横穴式石室）、大橋川沿いの朝酌岩屋古墳（横穴式石室）等多くのものが知られている。そして十王免横穴群、孤谷横穴群などの大規模な横穴群も、丘陵山腹に穿たれている。また、埴輪窯跡として知られている平所遺跡も位置する。

次の律令時代に入ると、奈良時代の『出雲国風上記』によれば意宇平野周辺部は、意宇郡に属し出雲国守をはじめ意宇郡家、黒田驛などの公的施設が置かれた。そして、国府城北東の竹矢町には出雲国分寺や国分尼寺の両官寺が建立された。また、山代郷の北の新造院として来美庵寺等の私寺も建立されており、この地域が奈良・平安時代には出雲国の政治・文化の中心地であったと言えよう。

参考文献

『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』 島根県教育委員会 1983年



第1図 勝負遺跡の位置と周辺の遺跡

(1:25,000)

- | | | | | | |
|---------------|--------------|--------------|------------|-------------|-----------|
| 1.勝負遺跡 | 2.石台遺跡 | 3.平所遺跡 | 4.間内益塙丘墓 | 5.迴田古墳 | 6.十王免横穴墓群 |
| 7.来美墳丘墓 | 8.来美寺 | 9.来美遺跡 | 10.井手平古墳群 | 11.永久宅後古墳 | 12.山代方墳 |
| 13.山代二子塚 | 14.大庭鶏塚 | 15.向山東古墳 | 16.向山西古墳 | 17.石屋古墳 | 18.東光台古墳 |
| 19.20.高杉古墳群 | 21.伝兵衛山古墳 | 22.伝兵衛山古墓 | 23.慶日神社前遺跡 | 24.タルミ I 遺跡 | |
| 25.タルミ III 遺跡 | 26.タルミ IV 遺跡 | 27.古志原遺跡 | 28.曉ヶ谷遺跡 | 29.根屋古墳 | |
| 31.岡古墳群 | 32.岡横穴群 | 33.横田古墳群・横穴群 | 34.室羅古墳群 | 35.奥金見古墳群 | |

II 調査に至る経緯

今回の勝負遺跡の調査は、昭和55～56年に行った暫定道路部分の残り4車線の本道工部分についてである。

一般国道9号松江道路は6車線が計画されており、昭和57年に行われた島根県主要関連道路として供用するために、昭和55・56年の2ヶ年にわたって計7遺跡（春日遺跡、夫敷遺跡、布田遺跡、中竹矢遺跡、才ノ峠遺跡、勝負遺跡、石台遺跡）の調査を行った。

その後、60年度に建設省から一般国道9号松江道路の残り4車線の本道工部分の調査依頼があり、協議の結果61年度に春日遺跡から調査を行った。

平成元年度は、本道工部分の調査に入り4年目であり、一般国道9号松江道路ルート内の勝負遺跡の調査を行った。

III 調査の経過

平成元年度の調査は、前回の調査結果に基づいて調査区を設定した。第Ⅰ・Ⅱ調査区は、低丘陵の尾根、斜面となっており、前回の調査で遺構、遺物を多く検出した部分である。第Ⅲ調査区は、丘陵の斜面が急峻なため、前回の調査では遺構を検出していない。

調査は、4月17日に第Ⅰ調査区の地形測量を行い、4月25日に調査区を設定した。

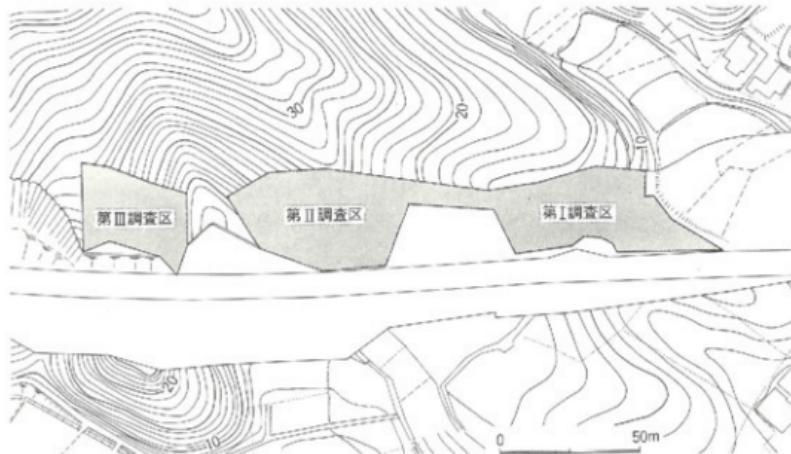
第Ⅰ調査区は、当初考えていたより盛り土が厚く堆積しており、6月22日より遺構の精査を行った。その結果、ピットを多数検出し、8月30日より遺構の実測を行った。その後、このピット群の下層が遺物の包含層であることが判明する。9月11日より掘り下げていったところ竪穴住居跡を確認した。第Ⅰ調査区では合計10基の竪穴住居跡を検出し、10月31日に全体写真を撮影し調査を終了した。

第Ⅱ調査区は、8月17日より表土掘削を行った。北側の斜面において、11月16日、竪穴住居跡を6基検出した。12月13日に全体写真を撮影し、12月15日に住居跡の実測を行い調査を終了した。

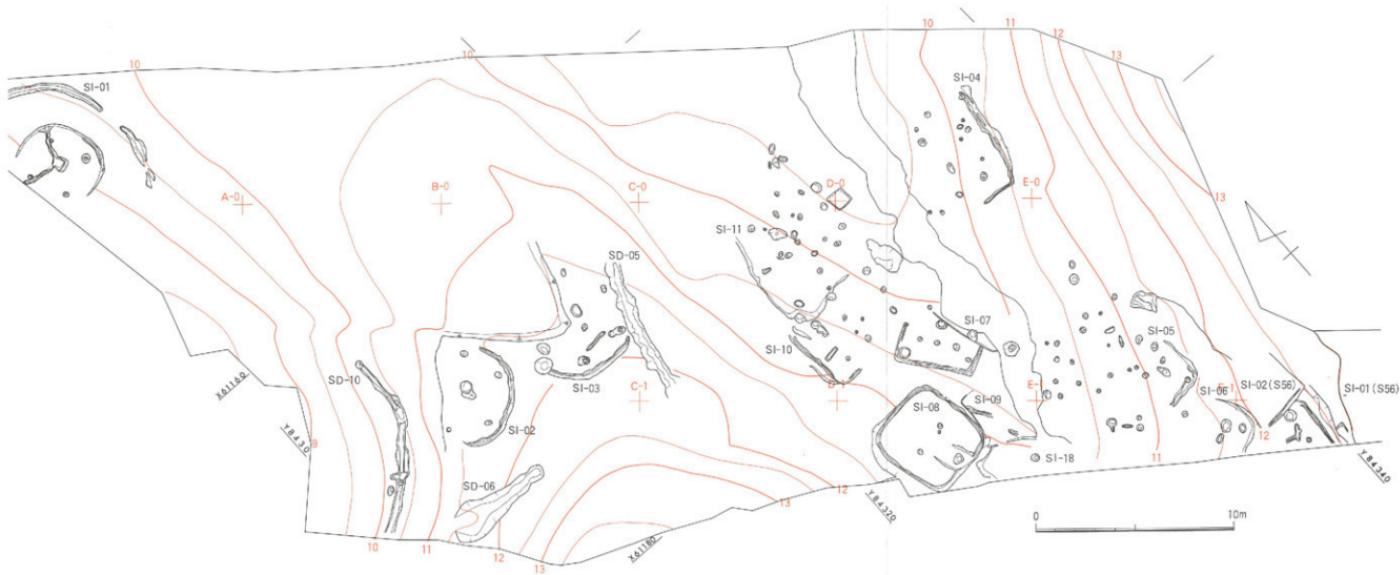
第Ⅲ調査区は10月30日から地形測量を行い、11月6日より表土掘削を行った。北側の斜面は、かなりの急勾配であり表土の堆積は薄かったが、東側の斜面は尾根となっており、ピットを確認した。12月1日に全体写真を撮影し、12月22日に実測を行い全調査を終了した。

IV 遺 跡 の 概 要

今回の調査では、第Ⅰ調査区、第Ⅱ調査区において弥生時代から古墳時代にかけての住居跡を検出し、第Ⅲ調査区においては古墳時代のピットを検出している。第Ⅰ調査区は、北側へ向けて派生する尾根上においてSI-01, 02, 03、谷部においてSI-04, 05, 06, 07, 08, 09, 10, 11, 18を検出した。SI-01～03周辺は後世の耕作においてかなり削平を受けているが、谷部においては深いところで厚さ1.5mの包含層が流入していた。溝（SD-01）は、第Ⅰ調査区中央部を南北方向に横切る幅約2mのものであるが、谷の奥が近世に堤として利用されており、それに伴う水路と考えられる。耕作土下の黒色土を除去したところ、多数のピットが検出された。ピット上に堆積した黒色土中からは、弥生土器、土師器、中世の土師質土器が含まれていた。第Ⅱ調査区においては標高22.0mの尾根の北側斜面において、SI-12, 13, 14, 15, 16, 17を検出した。これらの住居跡はいずれも斜面に位置するため、斜面下側が流出している。また、調査区の北部において幅2.10m、深さ1.63mの溝を検出した。この溝の上部は近世の堤の土手となっており、土手が版築状に築き固められている。尾根の上部から南側の斜面にかけては遺構を検出することはできなかった。第Ⅲ調査区は、標高29.0mを測る尾根である。丘陵の北側斜面はかなりの急斜面であり、遺構は尾根上の緩斜面であり、遺構は尾根上の緩斜面においてわずかなピットを検出したに過ぎなかった。これらも柱穴等の明瞭なものではなく根の搅乱の可能性が強い。



第2図 調査区配置図



第3図 第1調査区遺構位置図

第I調査区

SI-01 (第4図)

第I調査区の北西部、西向きの緩斜面に位置している。黄色土の地山に掘り込まれた、隅丸方形の住居跡であり、東側の壁は良く残っているが、西側の壁は斜面下側となるため残っていない。覆土は、大部分に焼上の混入した暗褐色土が入っていた。住居跡は、一辺4.3mを測り、東側の壁高54cmを測り、垂直に近く立ち上がる。

住居跡の床面からは、主柱穴 ($P_1 \sim P_4$)、中央ピット、溝を検出している。主柱穴間の間隔は、2.2mで、ピットの上縁の径は20~40cm、深さ60cmを測る。中央ピットは、方形を呈し、大きさ70×80cm、深さ20cmを測る。中央ピットの覆土は、下より黒色土（炭化物多し）、暗褐色土、黄色粘土の順で堆積している。溝は、北側が最も高く、中央ピットへ続き、西側へと続いている。溝の幅は20cm、深さ5~20cmとなっている。溝の中には、焼土に炭化物が混入した土が入っていた。中央ピットの西側部分は、地山と同じ土で溝に蓋をする形となっていた。床面は、ほぼ水平で貼り床は確認していない。中央ピットの南側が30×40mの範囲で焼けていた。床面の上には炭化物が堆積し、その上に中央ピットを中心とした1.6×2.4mの範囲に焼土が堆積していた。炭化物には、柱材と思われるものがあり、焼失住居と考えられる。遺物は、弥生土器の壺1、甕2が床面より出土している。甕は中央ピットの北側に隣接し、甕は中央ピットの西側と、もう一点は北壁寄りから出土している。

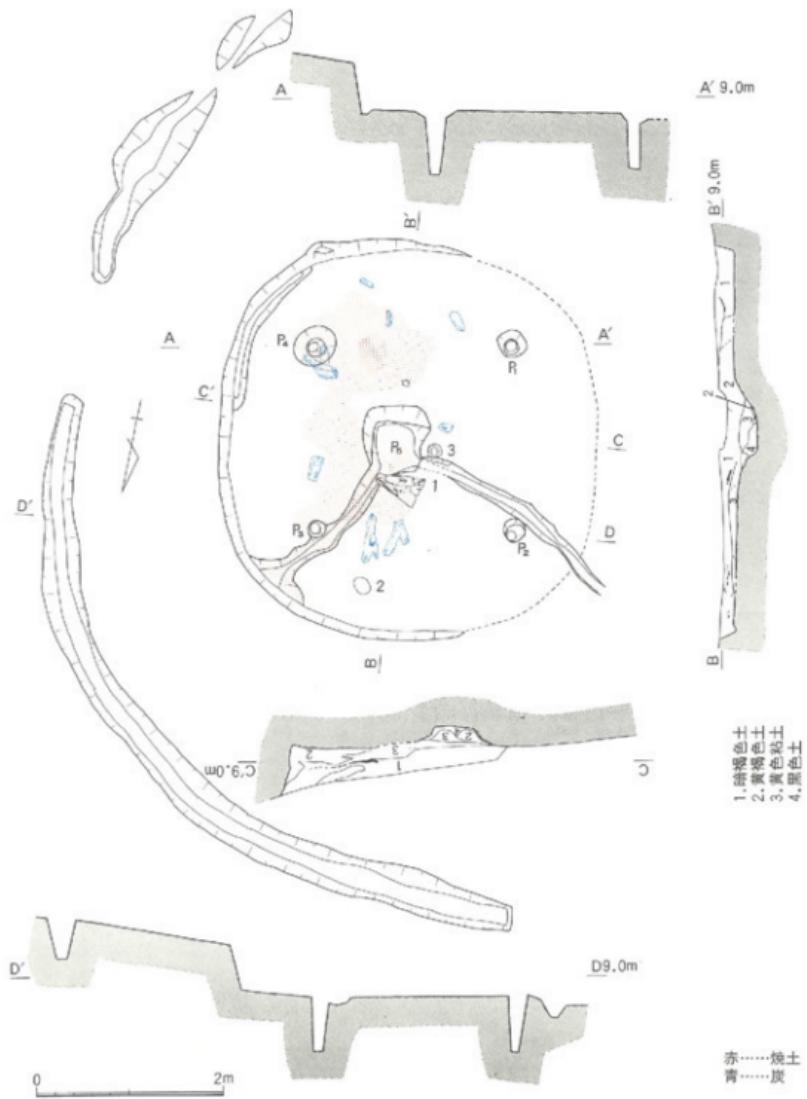
住居跡の東側1.5~2mの間隔のところには、幅40cm、深さ10~40cmの溝が開いている。この溝は住居跡の東側で、長さ1.2mにわたって途切れる部分があり、排水溝としての機能は果さないと思われる。

SI-01出土遺物（第5図）

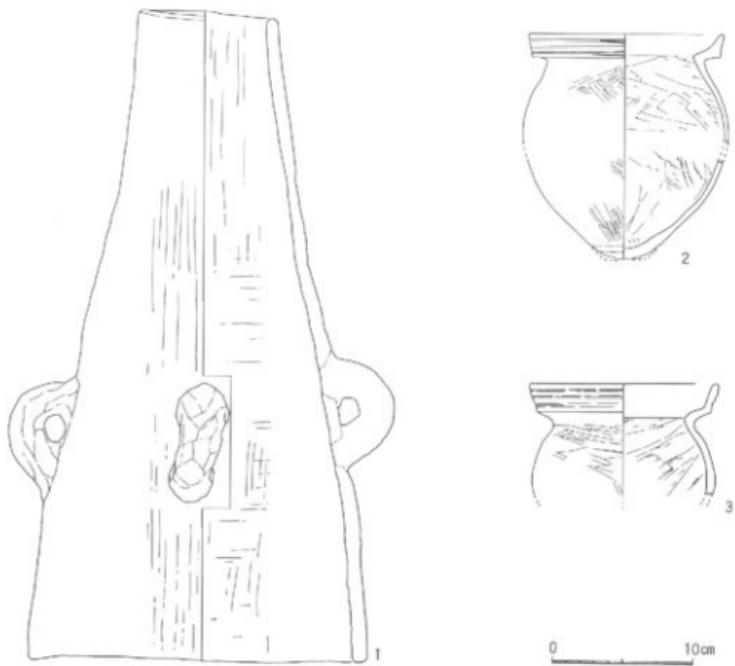
壺形土器（第5図1）は、底部から内湾気味に立ち上がり、上半が細くなり口縁部となっている。口縁部径10.0cm、底径24.2cm、器高46.7cmを測る。底部から上へ11cmの位置に把手が縦方向に4ヶ所付いている。把手は、体部に差し込み接合されており、差し込みの穴は上側の方が大きく開けられている。把手は、上部の方が厚く造られており、吊り下げ用に使用したものと考えられる。外面には、細かい刷毛状工具を使用したナデが、内面はヘラケズリの後ナデを施している。把手の付近に若干のスス状の付着物が認められる。

壺形土器（2,3）2は、胴部の中程を欠くものの、ほぼ完形に復元し得た。口縁部は、外面に3条の沈線を入れた後、ナデている。内面頸部以下は、ヘラケズリを施している。口径14.0cm、器高18.8cmを測る。

3は、体部から上半の破片で、口径14.0cmを測る。内面頸部以下はヘラケズリ、外面はヘラミガキを施している。これらの土器は、弥生時代後期前半と考えられる。



第4図 SI-01実測図



第5図 SI-01出土遺物実測図

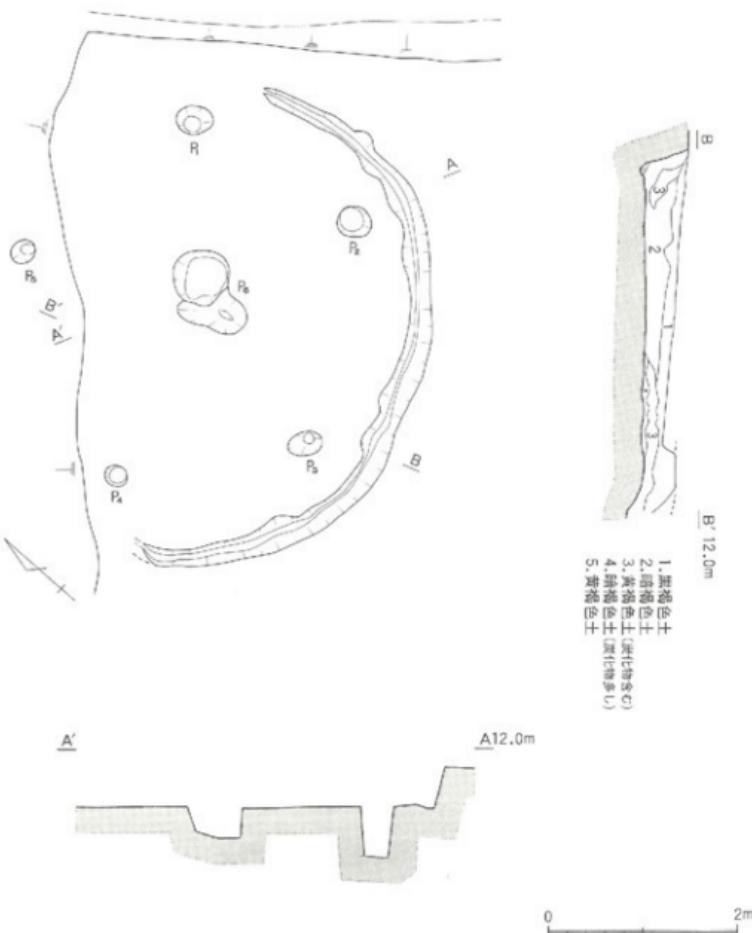
SI-02（第6図）

第1調査区の西側、丘陵尾根上に位置する。住居跡の北西側は斜面のため残存していないが、平面形は復元すると五角形を呈すと思われる。覆土は、大部分が暗褐色土（炭化物を含む）で、一部黄褐色土（炭化物を含む）も入っている。住居跡は、長さ5.3mを測り、壁は南東側で高さ55cmを測り、やや傾斜して立ち上がる。

柱穴は、主柱穴が5（P₁～P₅）と中央ピットがある。主柱穴間の間隔は、それぞれ2.0～2.5mを測り、深さは40～55cmを測る。中央ピットは不整形を呈し、2段に掘り込まれている。ピット内には暗褐色土（炭化物を含む）が入り込んでいる。

住居跡の床面は平坦で、貼り床は認められなかった。東側の壁が残る部分には、周溝が周っている。周溝は、底面の幅10cm、深さは5cmを測る。

遺物は、住居跡内からは出土せず、北側の斜面において弥生土器・甕（第7図1）1点が出土している。



第6図 SI-02実測図

要は、口縁部から体部上半にかけての破片である。口縁は内傾して立ち上がり、頸部から体部にかけて直線的に開いている。口縁外面に2条の凹線を施し、頸部以下の内外面にハケメを施す。この土器の時期は、弥生時代中期後葉と思われる。

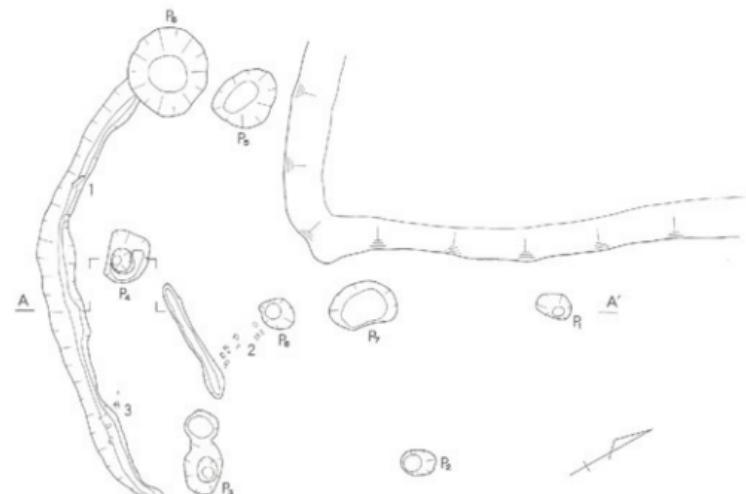
SI-03 (第8図)

第I調査区の西側、SI-02の東側に隣接して位置する。住居跡の上部は、後世の耕作によりかなり削平を受けており、南側の壁を残すのみとなっている。また、東側を溝（SD-04）によって切られている。

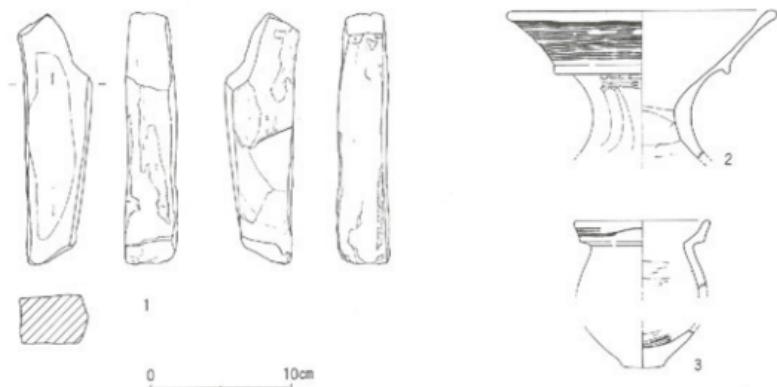
この住居跡の平面形は、復元すると六角形を呈していたと思われる。床面から主柱穴6（P₁～P₆）、中央ピット1（P_c）を検出している。北西コーナーの主柱穴が1つ削平されているが、本来は中央に1、周囲に6の柱穴があったと思われる。柱穴の径は、30



第7図 SI-02出土遺物



第8図 SI-03実測図



第9図 SI-03出土遺物実測図

～60cm、深さ45～63cmを測る。柱穴それぞれの間隔は、2.2～2.5mを測る。中央ピットは、楕円形を呈し、大きさ45×70cm、深さ35cmを測る。 P_3 と P_4 の間には、南壁と平行するように、長さ1.3mの溝が走っている。床面は、ほぼ平坦で貼り床は認められなかった。

遺物は、Pと溝の間から弥生土器・器台形土器（第9図3）が、南側壁の周溝内より甕（3）が、西側壁周溝内より砥石（1）が出土している。

SI-03出土遺物（第9図）

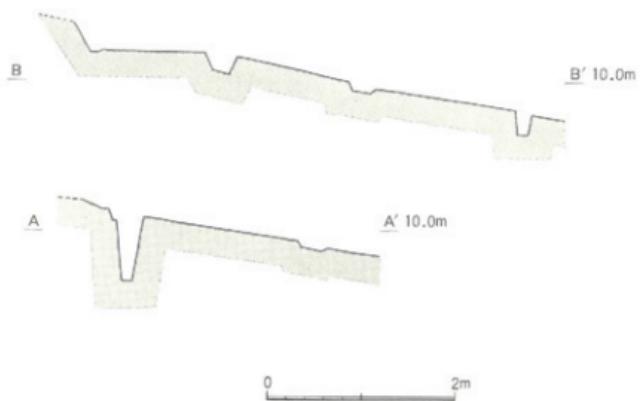
1は、砥石で側面の4面とも使用痕が残っており、その内の一面が最も使用され摩滅している。2は、器台形土器の受部から首部にかけての部分であり、筒部がやや太いものである。受部の外面には、15条の沈線を施した後、ヘラミガキにより一部を消している。受部径19.3cmを測る。2は甕で、口縁部外面に4条の沈線を施した後に一部ナデ消している。底部はやや丸味を持つ平底である。これらの土器は、弥生時代後期後半と思われる。

SI-04（第10図）

第I調査区の北東部、西向きの緩斜面に掘り込まれている。斜面上部を掘り込み、周溝をめぐらせていている。南北方向の残存長5.6cm、東西方向の残存長1.8mを測る。東側の壁は、高さ40cmで緩やかに傾斜しながら立ち上がる。

柱穴状のピットは、14穴検出しているが、径16cm～40cm、深さ10～70cmと一定ではなく、ピットの底も平坦ではなく、柱穴とするには困難なものが大部分である。また、ピットには規格性がなく、並びもはっきりとしない。

この柱居跡から遺物は出土していない。



第10図 SI-04実測図

SI-05（第11図）

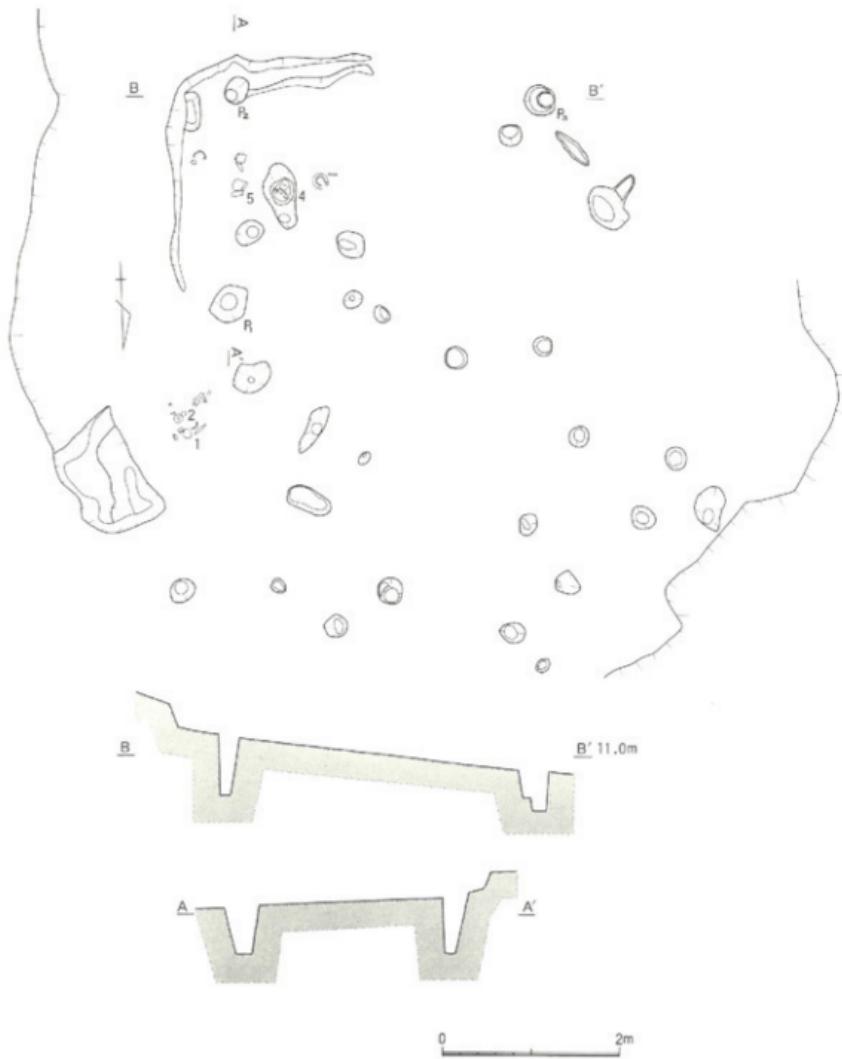
第1調査区の南東部、SI-06の北側に位置する。住居跡の東壁、南壁を検出している。東壁2.4m、南壁2.2m、東壁の高さ30cmを測る。

柱穴は、住居跡に伴うと考えられるものが、P₁、P₂、P₃の3つである。P₁とP₂は、柱間距離2.3mを測り、柱穴の底の標高も同一である。P₂とP₃は、柱間距離が3.6mを測り、P₂の方がP₃より約20cmほど底が高くなっている。その他、ピットは多数検出しているが、柱穴としての並びは確認できなかった。

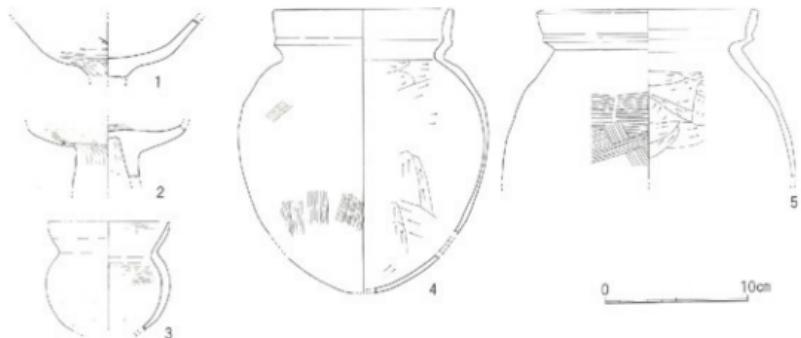
遺物はピット内より土師器、甕（第12図4）が出土している。このピットの東側から、土師器、甕（5）が出土している。土師器・高杯（1, 2）は、P₁の北東側から出土している。

SI-05出土遺物（第12図1～5）

1, 2は、土師器・高杯でいずれも、杯上端部、脚下端部を欠いている。1は、杯部の破片で、底部から口縁部へ向け緩かに外反しながら立ち上がっている。杯部外面はヘラケズリ、内面はナデを施している。脚部との接合部外面はヘラケズリを行っている。2も高杯の杯部から脚部にかけての破片である。杯部外面、脚部外面にヘラミガキを施し、脚部内面にヘラケズリを行っている。3は、土師器・小形丸底壺で底部を欠いている。住居跡の覆土中より出土している。口縁部が内湾気味に立ち上がり、体部に丸味を有す。口縁外面にヨコナデ、体部上半外面はハケメの後ナデ、下半外面はヘラケズリの後をナデしている。口縁から体部上半内面は、ハケメの後をナデしている。口径8.6cm、残存高7.7cmを測る。4は、土師器、甕で二重口縁を持つ。口縁部にやや厚みを持ち、下端の突出も緩かである。体部は肩がよく張り、底部に至る。口径12.6cm、残存高20.0cmを測る。口縁部内外面にヨコナデ、体部外面にハケメを施す。5も、二重口縁を持つ土師器、甕である。口縁部の器壁がかなり厚く、上端部に平坦面を持つ。体部外面にやや粗いハケメ、内面にヘラケズリを施している。口径15.6cmを測る。これらの土師器の時期、1, 4がやや前期的と思われるが、その他は古墳時代中期と考えられる。



第11図 SI-05実測図



第12図 SI-05出土遺物実測図

SI-06（第13図）

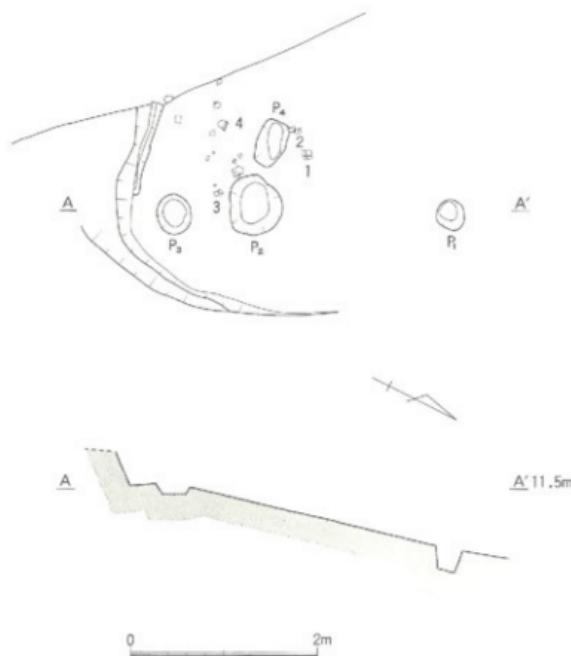
第I調査区の南東部、SI-05の南側に位置する隅丸方形の竪穴住居跡である。南東コーナーのみ検出しており、西側は調査区域外となっている。南側の壁は、高さ28cmを測り、南側壁に周溝が周っている。周溝の底辺の幅5cm、深さ4cmと深いものである。

柱穴は、P₁、P₃がある。P₁とP₃の底辺では80cmの差があり、主柱穴の並びとは考えられない。本来、住居跡の北側には貼り床が厚くされていたと思われ、確認しなかったピットがあったと思われる。また、調査区域外の状況も不明のため、主柱穴の状況は不明である。P₂、P₄は、極めて浅いピットであり、両者ともに底に赤褐色の土が入り、上部に焼土が入っていた。

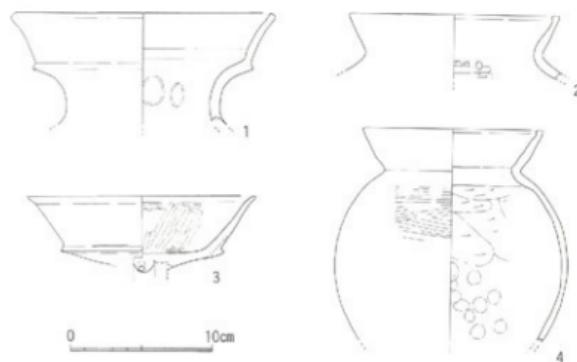
遺物は、P₁の北側から土師器・甕（1）、（2）が、P₄の南側より甕（4）が、P₂とP₃の間から高杯（3）が出土している。

SI-06出土遺物（第14図）

1は、土師器・甕である。二重口縁を有す甕で、口縁内外面にヨコナデ、頸部内面に指頭圧痕を施している。口径18.8cmを測る。2・3は、布留系の土師器・甕である。2は、口縁端部が内側に肥厚し、上端に平坦面を有す。口縁内外面にヨコナデ、内面頸部以下にヘラケズリを施している。口径14.8cmを測る。4は「く」の字形の口縁部を呈し、体部はややなで肩である。口縁部の内側は肥厚している。口縁部の内外面にヨコナデを施し、体部外面はハケメの後にナデ、体部内面の上半にヘラケズリ、下半に指頭圧痕が残っている。3は、高杯で杯部の外面に稜を有す形態である。杯部は、直線的に立ち上がる。外面はナデ、内面はヘラミガキを施す。脚部との接合は、円板充填の後を下方から刺突している。口径16.2cmを測る。これらの土器の時期は、1が古墳時代前期、2～4は中期と考えられる。



第13図 SI-06実測図



第14図 SI-06出土遺物実測図

SI-07（第15図）

第I調査区の東側の谷部に位置する、黄褐色土の地山に掘り込まれた方形の住居跡である。東側を溝（SD-01）と切り合っており、検出不可能であった。両者は、SD-01（新）、SI-07（古）の新旧関係になる。覆土は、暗褐色土が多く流入していた。

住居跡は、平面形が方形で、一辺4.2m、東壁の高さ20cmを測る。床面より、主柱穴4（P₃～P₅、P₇）と、浅いピット3（P₁、P₂、P₆）、貯蔵穴（P₈）を検出した。主柱穴間は、P₃～P₅、P₄～P₆間はそれぞれ90cm、P₃～P₄は1.7mを測る。主柱穴は、片側3個の並びが対になる、6本柱の構造であったと考えられる。ピットの上縁の径は20～34cm、深さ55～70cmを測り、覆土は暗褐色土である。北西の隅より円形のピットを検出している。上縁の径は60cm、深さ40cmを測る。ピットの底面は平坦で、ピット内から遺物は出土していない。このピットは、貯蔵穴としての機能が考えられる。また、中央部には焼土の入った浅いピットがあり、50×40cmの範囲が焼けていた。住居跡の床面は、地山が東側へ向け傾斜しており、本来は貼り床がされていたと思われる。住居跡の床面には、貯蔵穴の前後を除いて周溝が周っている。周溝の底面の幅5cm、深さ2cmを測る。

遺物は、P₃の東側床面より壺（1, 2）、P₅の北側より高壺（4）、北壁周溝内より高壺（5）が出土している。

SI-07出土遺物（第16図）

壺（第16図1～3） 1は、体部に丸味を有する壺で、外面の体部と底部の境にヘラケズリを施している。体部内外面はヨコナデを施す。口径11.8cm、器高3.7cmを測る。2は、底部に高台状に粘土を貼り付けている。体部外面に指頭圧痕が残り、器形も歪んでおり、手捏風の成形を施している。口縁部の内外面にはヨコナデを施している。口径15.5cm、器高4.9cmを測る。3の壺も底部を高台状に作っている。内外面ともナデを施している。口径11.3cm、器高4.5cmを測る。

高壺（第16図4～6） 4は、体部に丸味を有する高壺で、脚部を欠いている。壺部の口縁部は、まっすぐ立ち上がり、端部に丸味を有している。外面は、縦方向のハケメの後をナデており、底部と脚部に指頭圧痕が残っている。内面は、ハケメの後を丁寧にナデしている。脚内上部に径6mmの刺突痕が施される。口径15.0cm、残存高6.0cmを測る。5も体部に丸味を有する高壺である。体部内外面にヨコナデを施し、脚部との接合部分にハケメが残る。脚部外面にナデを施す。口径15.3cm、残存高8.3cmを測る。6は、壺底部が平坦で、外面に棱を有し、口縁部へ向け直線的に開く形態である。外面はナデ、内面はハケメの後をナデしている。口径16.6cm、残存高5.6cmを測る。

これらの土器は、高壺が体部に丸味を有するものと、体部に棱を有するものが共伴して出土している。また、壺もこれに伴って出土していることなどより、土器の時期は古墳時代中期中頃と考えられる。

SI-08 (第17図)

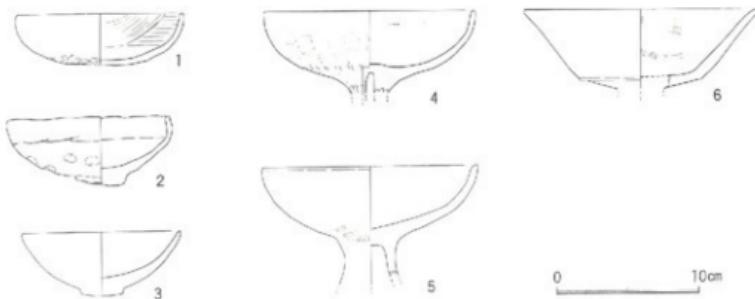
第I調査区の南東部の緩斜面に位置する。黄褐色土の地山に掘り込まれた、隅丸方形の住居跡である。東側の壁は、SI-09と切り合っており、残りが悪い。覆土は、下層に炭化物を少量含む褐色土が入り、その上に多量の炭化物を含む黒褐色土が流入している。住居跡の規模は、 $4.3 \times 4.7\text{m}$ を測り、壁高は南側の一番残っている部分で50cmを測る。

柱穴は、主柱穴が2 (P_1, P_2) で、その他浅いビット2 (P_3, P_4)、貯蔵用ビット1 (P_5) である。この住居跡は、2本柱の建物であったと思われる。

主柱穴 (P_1-P_2) 間の間隔は1.6mで、ビットの径26~30cm、深さ72cm、80cmを測る。柱穴の覆



第15図 SI-07実測図



第16図 SI-07出土遺物実測図

土は暗褐色土である。P₃は、主柱穴P₂に隣接しており、径15cm、深さ50cmを測る。主柱穴P₂の補助的な柱の可能性がある。P₃は、西側の壁に掘り込まれている。深さ5cmと浅いものである。

P₄は、45×50cmの平面台形のピットで、深さ56cmを測る。このピットは、貯蔵穴としての用途が考えられる。

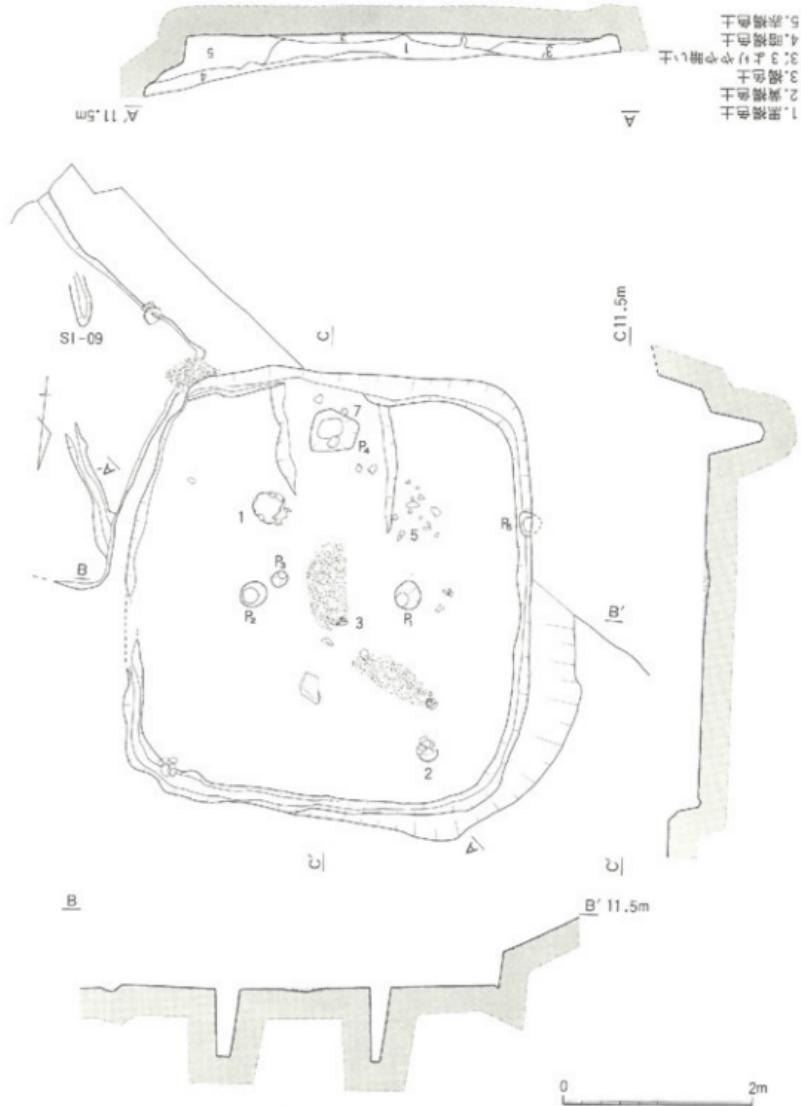
住居跡の床面は、南側から北側へ向け緩かに高くなっている。貯蔵穴の東西は、約5cm高くなりベッド状になっている。貯蔵穴（P₃）の周囲が住居跡内で低い部分ということになる。床面の中央部は、1.0×0.4mと1.0×0.3mの範囲で焼け、わずかに凹んでいる。その焼土の上部に灰が薄く堆積していた。

遺物は、貯蔵穴の上部より小形丸底壺（第18図7）、P₂の南側より壺（1）、P₁の南側より高壺（5, 6）、P₁の東側より甕（3）、北西コーナーより甕（2）が出土している。甕（4）は、覆土中からの出土である。

SI-08出土遺物（第18図）

壺（1） 複合口縁の壺で口縁部上端に平坦面を有し、上端部、下端部ともに外方へ向け丸く突出している。体部は、肩が張らず、長胴気味の形態を呈している。口縁内外面にヨコナデ、頸部内面に指頭によるナデを施している。体部外面の肩部から上半は、横方向のハケメ、下半は縦方向のハケメを施している。口径19.0cm、器高36.8cmを測る。

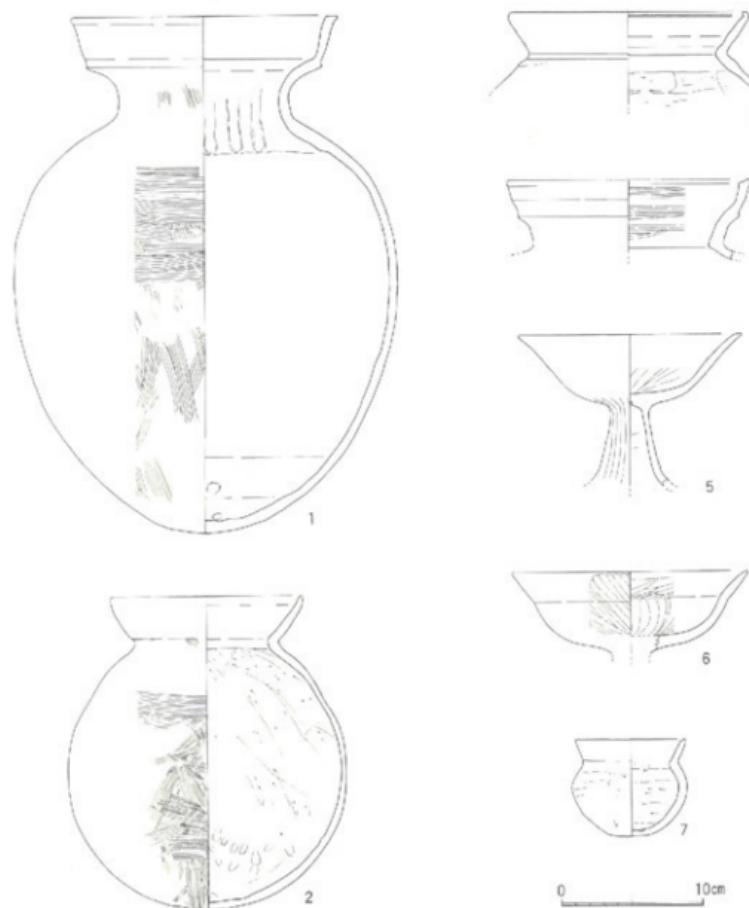
甕（2～4） 2は、単純口縁の甕で、口縁部が「く」の字状に開き、端部がやや内湾している。体部は、下半部に重心を持っており、丸底である。口縁部の内外面にヨコナデ、体部外面の肩部に横方向のハケメ、下半には不整方向のハケメを施している。体部内面は、ヘラケズリ、底部付近は指頭圧痕が残る。口径13.6cm、器高22.5cmを測る。3は、布留系の甕で、口縁の上端を内側に肥厚させている。口縁部は「く」の字状に直線的に開いている。口縁部の内外面にヨコナデ、体部外面



第17図 SI-08実測図

に粗いハケメの後をナデている。内面の頸部以下はヘラケズリを施している。口径17.0cmを測る。4は、二重口縁の甕で、口縁端部に平坦面を有し、口縁部下端の突出はわずかである。頸部の長さは長く、器壁も厚くなっている。口縁外面は、ヨコナデ、内面はハケメの後ナデを施している。口径17.2cmを測る。

高坏（5,6） 5は、杯部に丸味を有し、口縁部へ向けやや外反しながら広がっている。脚部



第18図 SI-08出土遺物実測図

は、緩かに広がっている。杯部の底部内面にはヘラミガキが放射状に施され、口縁部付近と外面はナデを施している。脚部外面は縦方向のヘラミガキが、内面はヘラケズリが施されている。脚内上部には、刺突痕が残る、口径16.0cmを測る。6は、杯部に丸味を有し、杯部中程で折曲して広がっている。杯部内外面ともヘラミガキを施している。

小形丸底壺（7） 口縁部が外方に直線的に立ち上がり、体部に丸味を有し、底部は不明瞭な平底である。口径より体部最大径が3mm大きくなっている。口縁部外面ヨコナデ、体部外面上部にヘラケズリ、下半はナデを施している。口径7.8cm、器高7.0cmを測る。

これらの土器は、4の甕が覆土中からの出土であり、やや新しい傾向が見られる。壺（1）は、複合口縁を呈しているが、突出部に丸味を持ち、胸部が長胴化している。また、2のような単純口縁の甕も共存していることより、古墳時代中期前半という時期が考えられる。甕（4）は古墳時代中期中頃と考えられる。

SI-09（第17図）

SI-08の南東部に位置する。平面形は、不整台形を呈し、柱穴も検出しており、住居跡とは考えられない。

SI-10（第20図）

第I調査区の南東部の緩斜面に位置する隅丸方形の住居跡である。

住居跡内とその周囲からピット10穴を検出しているが、いずれも浅く主柱穴とは考えられない。西側には、周溝が周っている。

西壁外側から、杯（第19図1）が出土している。

SI-10出土遺物（第19図1）

土師器・杯で底部を欠いている。丸味を持つ杯で、器壁はやや厚い。杯部外面上半にヨコナデ、底部付近にヘラケズリ、杯部内面にヘラミガキを施している。口径11.5cmを測る。この土器は、古墳時代中期と考えられる。

SI-11（第20図）

SI-10の北側に位置し、南側をSI-10と切り合っている。壁は、南側、西側が残っており、加工段状に平坦面を削り出している。竪穴住居とするより、掘立柱建物と考えるべきものと思われる。

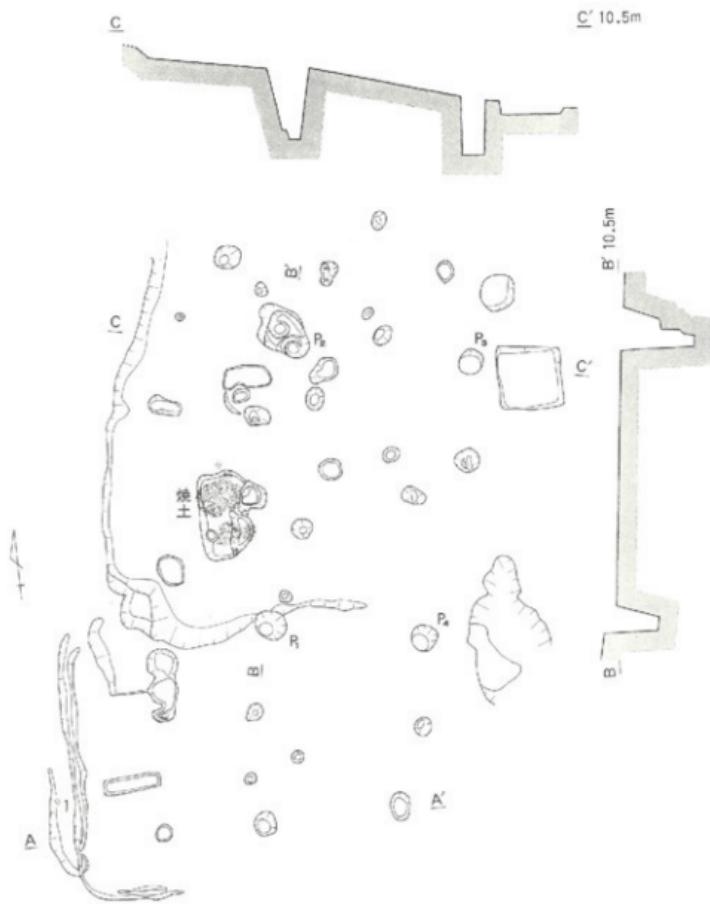
主柱穴は、P₁～P₄の4つである。P₁～P₂、P₃～P₄間の柱間距離4.0m、P₁～P₄、P₂～P₃が2.5mを測る。柱穴は、径が36～40cm、深さ75～104cmとかなり深いものである。

加工段の南東部分には、0.7×1.25m、深さ0.2mの落ち込みがあり、

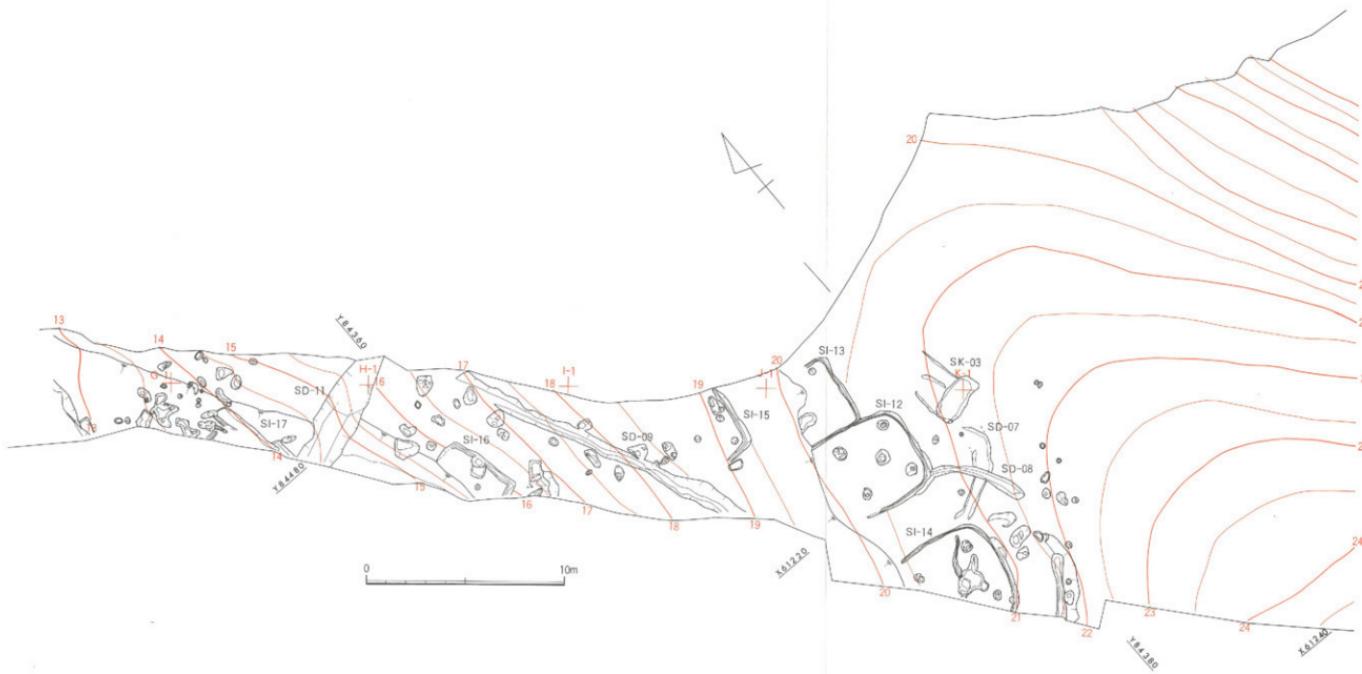
その落ち込みを埋めた上に焼上が0.2×0.55mと0.6×0.7mの範囲でみられた。遺物は、出土していない。



第19図 SI-10出土遺物実測図



第20図 SI-10-11実測図



第21図 第II調査区遺構位置図

第Ⅱ調査区（第21図）

Ⅱ区は、前回調査で遺構を多く検出しているⅠ区の南西側にあたる部分である。丘陵尾根が北へ向けて伸びる西側斜面から住居跡を検出している。標高20~21mの斜面から、SI-12, 13, 14を検出し、その西側斜面下部にかけてSI-15, 16, 17を検出している。いずれも斜面のため、下側半分は残っていない。SI-12~14, SK-01を境として、これより東側では今回の調査で遺構を検出していない。尾根の上部は、平坦面が広がるもの地山の上に堆積する土も少なく、東側の斜面も急斜面のため遺構はみられなかった。

SI-12（第23図）

第Ⅱ調査区のはば中央、標高20mの丘陵西側斜面に位置する。黄褐色土の地山に掘り込まれた溝丸方形の住居跡であり、西側は斜面下側のため残っていなかった。北壁は、SI-13と切り合っており、検出不可能であった。SI-12（古）、SI-13（新）という新旧関係になる。覆土は、東壁際に黄褐色土が入り、他は黒色土が流入していた。住居跡は南北で長さ4.8m、東側の壁高38cmを測る。

柱穴は、主柱穴が4 ($P_1 \sim P_4$)、中央ピット1 (P_5) を検出している。主柱穴間は、径60cm、深さ54~74cmを測り、柱間距離2.7mを測る。 P_1 , P_2 , P_4 は、径60cmの掘り方の中に、径20cm程の柱を立てて黄褐色土を埋め込んでいる。 P_3 は、中央ピットで径70cm、深さ50cmを測る。ピット内には、暗褐色土が入っていた。

住居跡の床面はほぼ平坦で、地山を削り床としており、貼り床等は確認されなかった。周溝は、西側と北側のSI-13に切られた部分を除いて周っている。底辺の幅5cm、深さ5cmと浅い溝である。

住居跡の東側から南側にかけて、1.3~2.0mの間隔をおいて、溝SD-07が周っている。この溝は、住居跡の東側部分でSK-01に切られており、途切れた形となっている。溝は、幅0.5~1.3mを測る。

遺物は、南側の周溝より弥生土器、器台（第22図1）が出土し、器台（2）が覆土中より出土している。また、器台（1）に隣接して、長さ45cm、幅10cmの炭化物が出土している。

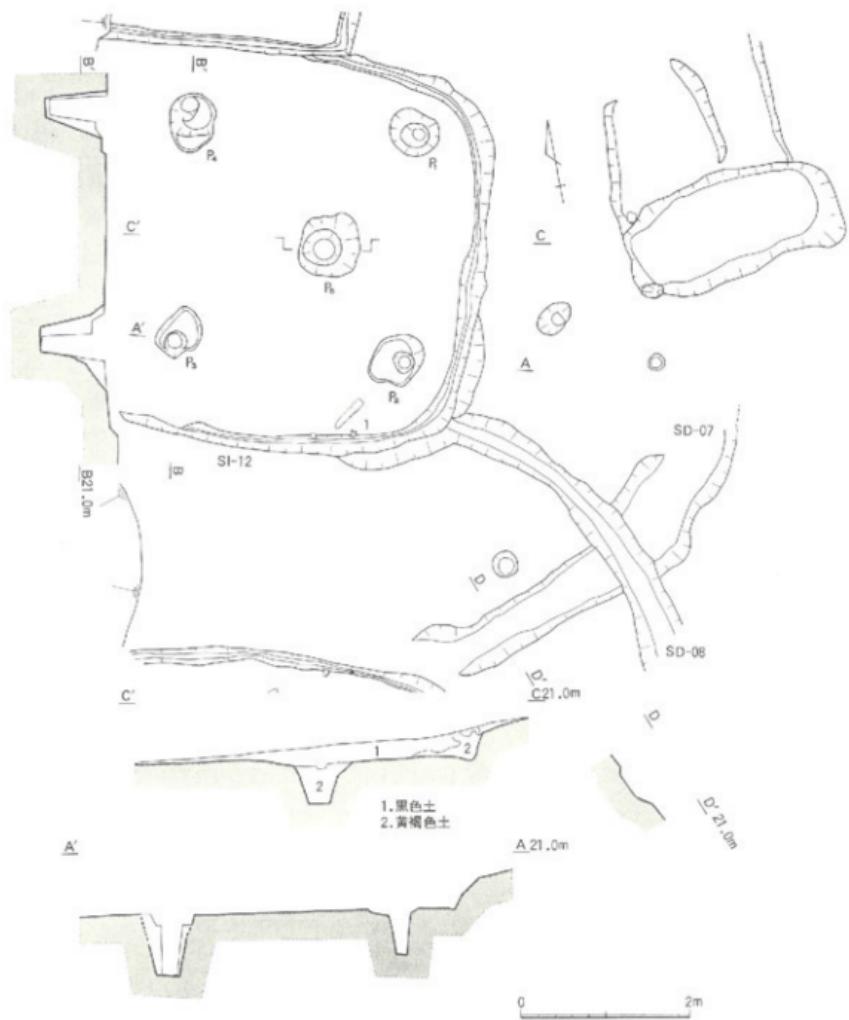
SI-12出土遺物（第22図）

1は、弥生土器、器台の筒部であり、外面の上下に4条の沈線を周らせ、その間に貝殻腹縁による刺突を2列施している。外面は、縦方向のヘラミガキを、内面受部はヘラケズリの後にヘラミガキ、内面脚部はヘラケズリを施している。

2は、器台の脚部の破片である。外面に櫛描沈線をめぐらし、内面はヘラケズリを施している。脚部径15.2cmを測る。これらの遺物の時期は、弥生時代後期後半と考えられる。



第22図 SI-12出土遺物実測図



第23図 SI-12実測図

SI-13 (第24図)

SI-12の北側で南壁を切り合って位置する。黄褐色土の地山に掘り込まれた方形の住居跡である。東壁と南壁が直線的であり、北壁はやや歪んでいる。住居跡の西側は、斜面となっており床面、壁とも残っていない。住居跡の規模は、南北長3.9m、東壁の高さ20cmを測る。覆土は、下から暗褐色土、黄褐色土、暗褐色土の順で堆積している。

主柱穴は、確認されず、浅いピット (P_1)、焼土を覆土とするピット (P_2, P_3) 2を検出している。 P_1 は、住居跡の北東コーナーに位置し、径35cm、深さ18cmを測る。 P_2 は、 $0.9 \times 1.1\text{m}$ の椭円を呈し、深さ20cmを測る。ピットの底に黄褐色土が入り、上部は焼けて赤色土となっている。焼土の範囲がピットより広がっていた。 P_3 は $0.6 \times 1.0\text{m}$ の規模で深さ15cmを測る。ピット内には暗褐色土が入っており、上部が $25 \times 50\text{cm}$ の範囲で焼けていた。

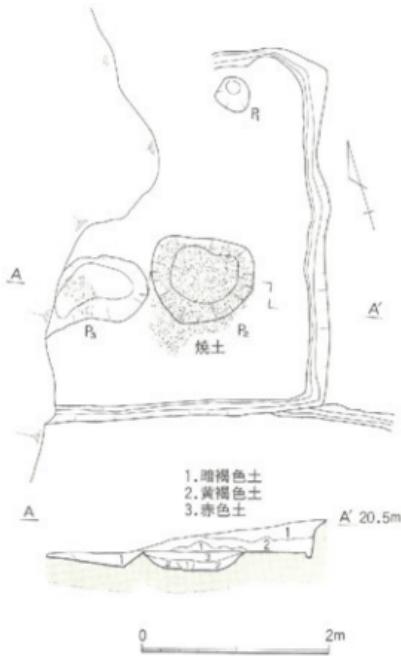
床面は、ほぼ平坦に地山を削り出しておらず、南側、東側、北側において周溝を確認している。周溝は、底の幅4~8cm、深さ6cmを測る。

遺物は、住居跡内から出土していない。

SI-14 (第25図)

第II調査区の中央東端の西向き斜面に位置している。黄褐色土の地山に掘り込まれた隅丸方形の住居跡で、南西コーナー側は調査区域外となっており、検出不可能であった。覆土は、暗褐色土が入っていた。住居跡の規模は、南北長5.2m、東壁の高さ40cmを測る。

主柱穴は、本来4本柱と思われるが、 P_1, P_2, P_3 の3穴を検出している。その他にピットは、 P_4, P_5 と中央ピット P_6 を検出している。主柱穴間の間隔は、 P_1 と P_4 が 2.8m 、 P_2 と P_4 が 2.7m を測る。柱穴は、上縁の径が $50 \sim 60\text{cm}$ 、深さ $68 \sim 84\text{cm}$ を測る。主柱穴の底径は 18cm を測る。 P_3 は、 P_4 と P_5 の柱穴を結ぶライン上にあり、深さ 10cm と浅いことより補助柱の可能性もある。 P_6 の上部には、 $30 \times 45\text{cm}$ の範囲で焼土がみられた。 P_6 は、南東コーナーの周溝部分に位置し、深さも 10cm で P_1 の補助



第24図 SI-13実測図

柱のピットとも考えられる。中央ピットは、不整形を呈しており、北東コーナーと南東コーナーにピットを接続したような形となっている。底は2段に掘り込まれており、東側が深さ20cm、西側で深さ43cmと深くなっている。覆土は、下層から黒褐色土（炭と灰が混入）、暗黄褐色土、黄褐色土、暗褐色土となっている。覆土中に炭、灰を含むことより中央ピットが火の使用に関係する施設と考えられる。また、北東コーナーからは、敲石が出土しているが、一部火を受けている。中央ピットの北側、東側でも床面が火を受けた部分がみられた。また、中央ピットには、北側と西側に幅10~25cmの溝が続いている。北側の溝は、中央ピットに接続する部分が低くなっている。

床面は、地山を削り出し平坦になっている。周溝は、壁沿いに開いており、溝底の幅4~8cm、深さ5~10cmとなっている。床面の北西コーナーでは、径15cmの範囲で赤色顔料の痕跡がみられた。

住居跡の東側には、2~2.7mの間隔をおいて溝（SD-08）が位置している。この溝は、住居跡の東側において幅3.3mにわたって途切れている。溝が途切れた部分は、住居跡に向かってピットが掘られている。このピットは、底が階段状となっており、住居跡の東壁も切り込まれ段が造り出していることより、住居跡の出入口の可能性が高いと思われる。住居の高所に位置する溝は、SI-01、12でもみられ同様の用途と思われる。SD-08は、幅25~60cm、深さ20~60cmを測る。

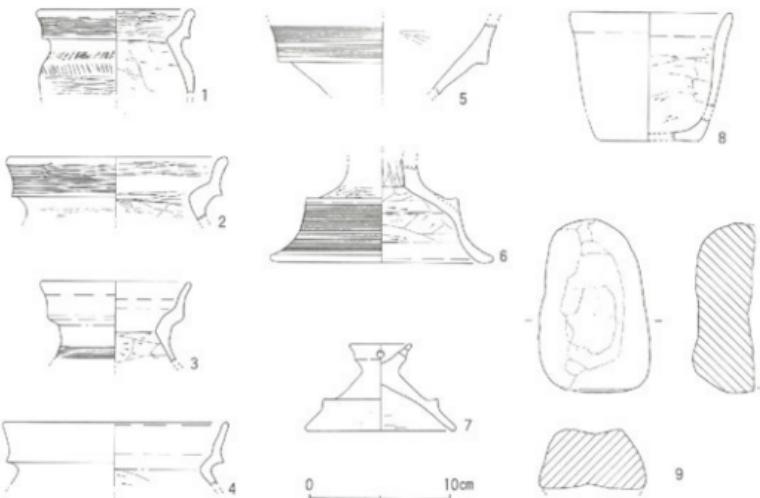
遺物は、中央ピット南西側より、弥生土器・甕（第26図1）、北西部より敲石（9）が出土し、東側周溝より蓋（7）、鉢（8）が出土している。床面から北側より器台（6）、P₂の南側で甕（2）が出土している。その他、西覆土中より壺、甕、器台が出土している。

SI-14出土遺物（第26図）

甕（1~4） 1は口径11.4cmを測る小形のものである。口縁部の器壁がやや厚く、外面に9条の沈線を入れ、内面はヘラミガキを施している。体部外面上半に貝殻腹縁による刺突を上下2段入れ、下半にかけてはヘラミガキを行っている。内面頸部以下はヘラケズリを行っている。2は、口径16.0cmを測り、口縁部の器壁が厚く、上端部に丸味を有し、下端部が斜め下方に突出している。口縁外面に8条の櫛描沈線を施す。口縁部から頸部にかけての内面はヘラミガキを入れ、内面頸部以下にヘラケズリを行っている。1, 2とも色調が橙色を呈し、焼成も良好である。3は口径10.8cmを測る口径の小さなもので、頸部もやや長い。口縁部は外反し、上端に丸味を有し、下端部も丸く折曲している。口縁部の内外面は、ヨコナデを施す。体部外面に4条の沈線が入り、内面頸部以下ヘラケズリを施している。4は、口縁部が外傾し、上端部に丸味を持ち、下端部は斜め下方に鋭く突出している。



第25図 SI-14, SD-08実測図



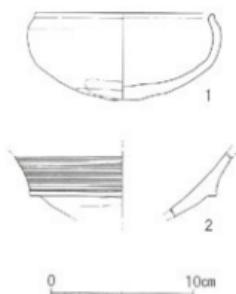
第26図 SI-14出土遺物実測図

器台（5, 6） 5は、受部下半から筒部にかけての破片である。受部外面には、12本の櫛描沈線が残り、内面はヘラミガキを施している。6は、筒部下半から脚部にかけての破片である。脚部径16.0cm、筒部径4.8cmを測る。脚部は外反気味に広がり、端部に丸味を有す。端部外面に20条の櫛描沈線文を入れ、内面にヘラケズリを施している。筒部外面下半はヘラミガキを施している。外面には赤色顔料が塗られていた。

蓋形土器（7） 7は、口径4.4cm、脚部径10.8cm、器高6.2cmを測る。つまみには、2方向に径5mmの穴が穿孔されている。脚部外面は、斜め上方に突出している。内外面ともナデが施される。

鉢形土器（8） 8は、小形の鉢形土器としたものである。平底を呈し、口縁部へ向け直線的に開き、端部の器壁はやや厚く、丸味を有している。外面はナデ、内面ヘラケズリを行っている。口径11.6cmを測る。

敲石（9） 石の片面が欠けており、片面にのみ敲打痕を残している。4.5×8.0cmの範囲内が使用により凹んでいる。大きさは7.0×12.3cm、厚さ4.3cm、重量650gを測る。



第27図 SI-15出土遺物実測図



第28図 SI-15実測図

辺の幅8~10cm、深さ7cmを測る。

遺物は、 P_1 の内から土師器・壺（第27図1）が出土している。弥生土器・器台（2）は覆土中から出土である。

SI-15出土遺物（第28図1, 2）

1は、土師器・壺で、壺部に丸味を有し、口縁端部を外方へ向け折曲させている。底部外面はヘラケズリの後にナデている。口径12.6cm、器高6.2cmを測る。この壺の時期は、古墳時代中期中頃と思われる。2は、弥生土器・器台で、筒部上半から受部下半にかけての破片である。外面に11条

SI-14出土の弥生土器は、壺の口縁部が複合口縁で、外面に沈線を施し、頸部内面にはヘラミガキを行っている。体部は、肩がよく張り、外面に貝殻腹縁による刺突文を入れている等の特徴があり、土器の時期は弥生時代後期後半と考えられる。

SI-15（第28図）

第II調査区の中央部、SI-13の西側に位置する。黄褐色土の地山に掘り込まれた隅丸方形の住居跡である。北側が調査区外となり、削られており、西側は斜面の下側となるため残っていない。覆土は、周溝内に黄褐色土、上部に暗褐色土が入っていた。住居跡は、南北の残存長3.5m、東壁の高さ40cmを測る。

主柱穴は、 P_2 、 P_4 の2穴で径36cm、深さ48cmと51cmで、柱間距離1.6cmを測る。

住居跡の床面は、地山を削り出しておらず、西側の斜面側には土が盛られていたと思われる。南側、東側の壁には周溝が周っている。周溝は底

の櫛描沈線を入れ、内面にヘラミガキを施している。この器台の時期は、弥生時代後期後半と考えられる。SI-16の時期は、古墳時代中期中頃と考えられる。

SI-16（第29図）

第II調査区の西側、西向きの緩斜面に位置する。黄褐色土の地山に掘り込まれた、方形の住居跡である。南西側は調査区域外となり、西側は丘陵斜面下側となるため検出不可能であった。覆土は壁際には黄褐色土が入り、その上に暗褐色土が入っている。住居跡は、南北長3.9m、東西の残存長1.8m東側壁の高さ57cmを測る。

主柱穴と思われるビットは、P₁穴であり、径25cm、深さ46cmを測る。東壁中央には、ビットが2段に掘り込まれている。上段のビットは、70×75cm、深さ5cmを測る。下段のビットは、50×70cm、深さ26cmを測る。

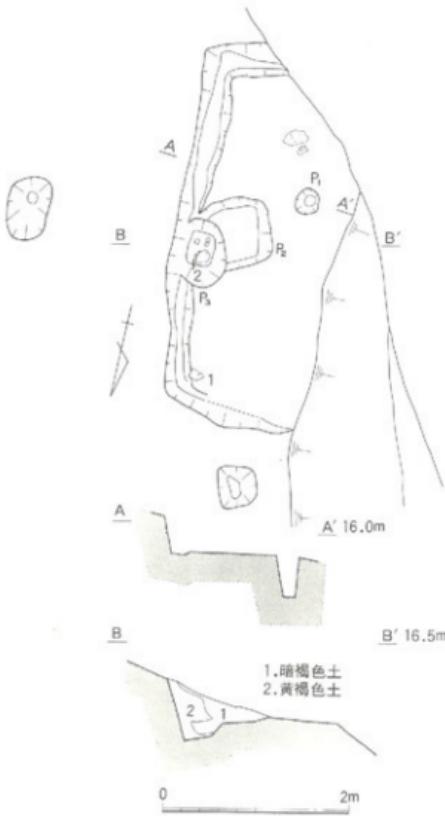
住居跡の床面は、地山を平坦に削り出しており、貼り床等は確認されなかつた。壁際には、周溝が開いている。溝底の幅5~20cm、深さ7cmを測る。

遺物は、P₃内より土師器、甕（第30図2）が、床面の北東コーナーから砥石（1）が出土している。

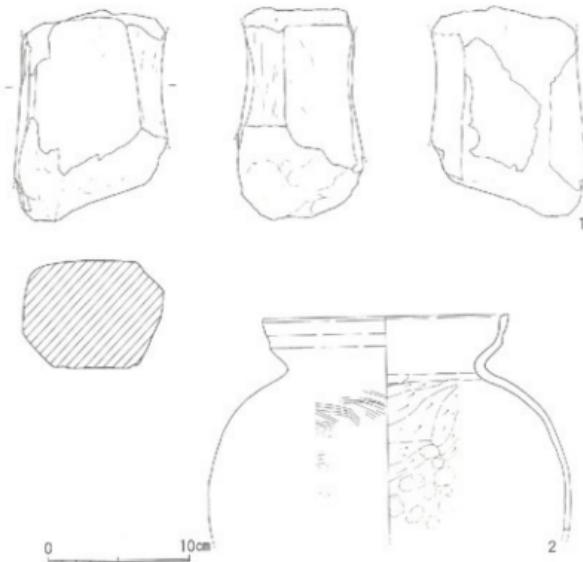
SI-16出土遺物（第30図1, 2）

土師器、甕2は二重口縁で、口縁部から体部上半にかけての破片である。口縁上端部の器壁がやや厚くなってしまい、平坦部を有し、下端部は緩かに折曲している。体部は肩が丸味を有している。口径17.4cmを測る。1は、砥石である。断面は六角形を呈し、6面とも使用によりかなり摩滅しており、細かな磨痕が残っている。

甕（2）の時期は、古墳時代中期中頃であり、住居跡の時期も中期中頃と思われる。



第29図 SI-16実測図



第30図 SI-16出土遺物実測図

SI-17（第31図）

第II調査区の西側、西向きの緩斜面に位置する。黄褐色土の地山に掘り込まれた方形の住居跡である。東壁の南北両コーナーを検出しているが、西側は調査区域外となっており検出不可能であった。覆土は、暗褐色土が入っていた。住居跡の南北残存長3.8m、東壁の高さ35cmを測る。

主柱穴と思われるピットは、検出していない。住居跡の北西部のピットは、後世のものである。

住居跡の床面は、地山を削り出しており、貼り床等は確認されなかった。床面の北側において、幅15cmと20cmの溝が掘り込まれていた。住居跡の東壁と方向性が同一のため、住居跡に伴う溝と考えられる。

遺物は、壺（第32図1）が東壁南側から、甕（2）が床面の中央、溝にかかる位置から出土している。甕（3）は、覆土中からの出土である。

SI-17出土遺物（第32図）

壺（1）は、体部に丸味を有し、口縁部が直立気味に立ち上がり、口縁端部に丸味を有す。内面は丁寧にナデている。口径14.6cmを測る。2は、単純口縁の甕で、口縁端部を欠いている。口縁部・体部とも器壁が全体的に厚いものである。口縁内外面、体部外面をナデしており、頸部内面に指頭圧

痕が残る。3も単純口縁の甕で、口径13.6cmを測る。口縁内外面ヨコナデ、体部外面に細かいハケメ、体部内面にヘラケズリを施している。これらの土師器の時期は占墳時代中期中頃と思われる。

SI-18（第33図）

第I調査区の南東部、SI-08の南側に位置している。黄褐色土の地山に掘り込まれた、隅丸方形の住居跡である。住居跡の壁の北東コーナー部分とピット3穴を検出している。壁は、北東コーナーのみであり、平面形が隅丸方形としているがやや形はくずれている。壁の高さは、北東コーナー部分で45cmを測る。ピットは、P₁、P₂、P₃を検出している。P₁は、径50cm、深さ32cmを測る。P₂は、径40cm、深さ16cmを測り、底部に凹凸がある。P₃は、径20cmと小形で深さ16cmを測る。

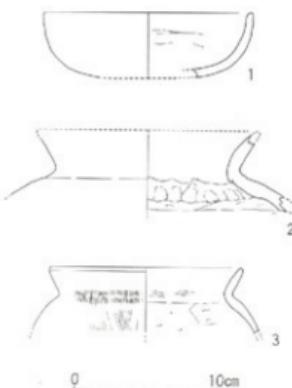


第31図 SI-17実測図

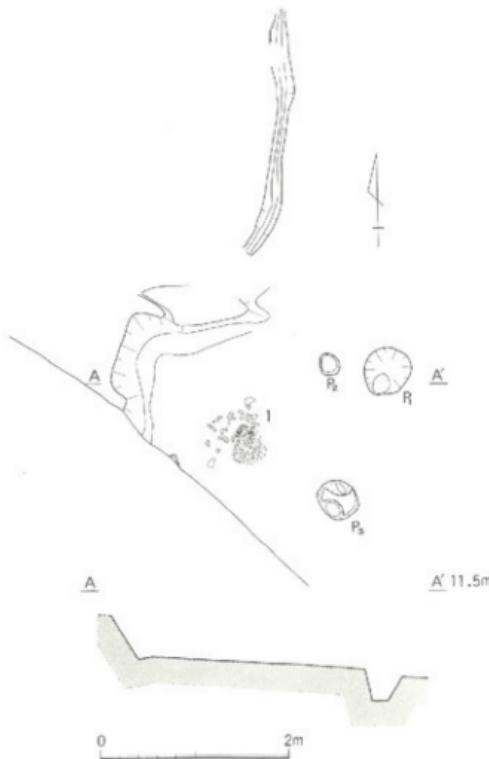
床面は、平坦で北東部において30×44cmの範囲で赤く焼けていた。この焼土に接するよう、土師器・甕（第34図1）が出土している。高杯（2）は、覆土中からの出土である。

SI-18出土遺物（第34図）

1は土師器・甕である。口縁部は、二重口縁がくずれた形となっている。口縁の上端部が把厚し、平坦面を有している。下端部は丸味を持って折曲しており、体部に丸味を有している。口縁内面にヨコナデ、体部外面にハ



第32図 SI-17出土遺物実測図



第33図 SI-18実測図

ケメ、内面にヘラケズリを施している。口径14cmを測る。2の高环は坏部の破片で、脚部は接合部分からはずれている。外面にミガキを施している。

1の甕は、二重口縁のくずれた形を呈しており、古墳時代中頃の時期が考えられる。

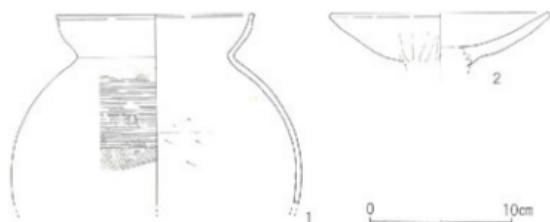
SD-01 (第36図)

第I調査区の東側の谷状部分に沿って位置し、南から北へ向けて流れていったようである。この溝は、第1層（黒色土）を除去後、第2層（黄褐色土）上面にて確認したものである。南北長24m、幅1.1~3.2m、深さは、南側0.8m、中央部1.4m、北側0.9m、南北の高低差は0.7m北側の方が低くなっている。

遺物は、土師器・小形丸底壺（第35図1）、石器（3）が覆土中より出土している。

SD-01出土遺物（第35図1, 3）

1は、土師器、小形丸底壺である。体部より口縁部の高さの比が大きいものであり、口縁部が直接的に開いている。口縁部外面は、ナデており、内面はハケメの後ナデしている。体部外面は、ハケメの後ナデしており、内面は底部にハケメが残る。口径12.0cm、器高



第34図 SI-18出土遺物実測図

6.4cmを測る。3は、河原石の一方が敲打により剝離している。9.9×3.6cm, 厚み2.2cm, 重量104.1gを測る。

SD-02（第36図）

第I調査区の東側, SD-01に平行して位置している。SD-01より1m程高所にあり, 検出していいる部分の長さ15m, 幅30~80cm, 深さ5~13cmを測る。南北の高低差は, 35cm北側の方が低くなっている。

SD-03（第36図）

第I調査区の東側, SD-01の西側に平行して位置している。検出した部分の長さ7.8m, 幅30~60cm, 深さ4cmと浅いものである。南北の高低差は, 20cm北側が低くなっている。溝内の北側より土師器・壺（第35図2）が出土している。

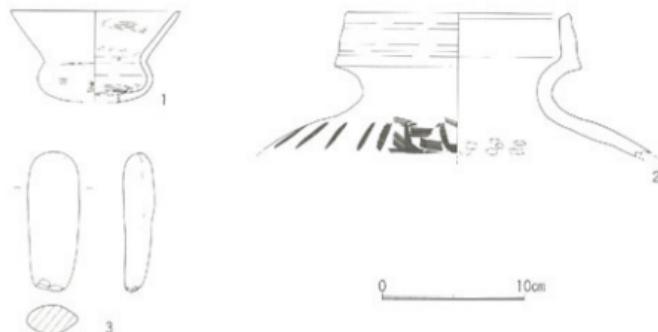
SD-03出土遺物（第35図2）

2は、土師器・壺で口縁部が内傾する複合口縁の壺で、口縁部体部ともに器壁が厚くなっている。口縁部内外面ヨコナデ、体部の上半に刷毛目原体による刺突文を周らせている。この壺の時期は、古墳時代前期と思われる。

SD-01と02, 03の間からビットを多数検出している。これらのビットは、SD-01と同様の覆土で黒色土が入っていた。ビットは、平面形が不整形で柱穴とは考えにくいものである。

SD-05（第37図）

第I調査区の中央部, SI-03の東側で切り合って位置している。新旧関係は, SI-03（古）、SD-05（新）である。溝の幅0.6~1m, 深さ6~11cmを測る。南北の高低差は、北側が65cm低くなっている。溝の覆土は、黒色土で、遺物は出土していない。



第35図 SD-01出土遺物実測図



第36図 SD-01・02・03実測図

SD-06 (第38図)

第I調査区の西側、SI-02の南西側に位置する。東西方向に主軸を持ち、長さ5.5m、東側の幅0.8m、西側幅1.9mを測る。深さ東側11cm、西側20cmで、底は西側の方が50cm低くなっている。溝の底は平坦で、壁は緩かに傾斜して立ち上がる。SI-02に伴う可能性がある。

遺物は、弥生土器、器台（第39図1）が溝の西側から、器台（2）、蓋形土器（3）が中央部分の溝底より出土している。

SD-06出土遺物（第39図1～3）

器台（1, 2） 1は、受部から筒部下半にかけての破片である。受部は、外反して口縁部に至り、上端部に丸味を有し、下端部は下方へ向け突出している。風化が著しく、調査は不明であるが受部内面に一部ヘラミガキが残っている。口径17.8cm、残存高11.8cmを測る。2は、筒部から脚部にかけての破片である。脚部外面に10条の沈線を入れ、内面はナデ、脚端部にミガキを施している。脚部外面は、指頭による縦方向のナデが、

筒部の上下にはヘラミガキを施している。

受部内面もヘラミガキを行っている。受部と脚部は、棒状の工具により、焼成前に穿孔をしている。脚部径16.9cmを測る。

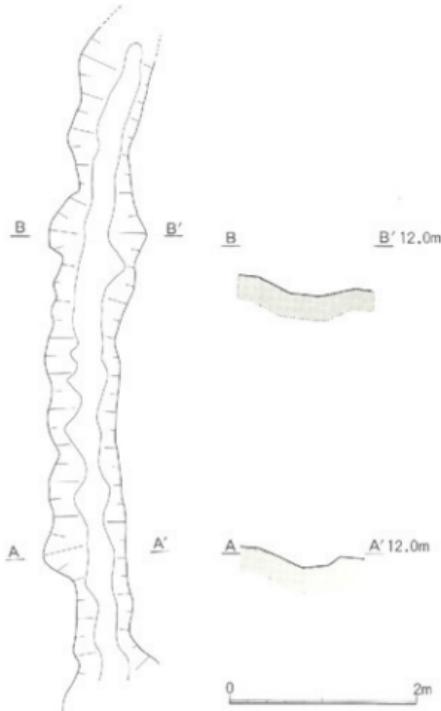
蓋形土器（3） つまみと思われる部分に2ヶ所、径4mmの孔が穿けられている。上部は、ハケメの後ナデ、筒部外面ヨコナデ、底部外面に2条の沈線が入っている。口縁部、底部とも端部を欠損している。

これらの土器の時期は、弥生時代後期後半と考えられる。

SD-09 (第40図)

第II調査区の中央部から西側にかけての標高19～17mの丘陵斜面に位置する。長さ16.0m、幅0.4～1.1m、深さ10～31cmを測る。南北での高低差は、北側が1.5m低くなっている。溝の覆土は、黒色土である。

遺物は弥生土器、壺（第41図2）が覆土中より出土している。



第37図 SD-05実測図

SD-09出土遺物（第41図1）

直口壺とも呼ぶべき器形であり、口縁部が直立し、体部へ向け直線的に開いている。口縁上端に3条の凹線を入れ、口縁部外面に5条の凹線を入れている。口縁部内面には、指頭圧痕が残る。体部外面には細かいハケメ、内面には粗いハケメを施している。口径14.8cmを測る。

この土器の時期は、弥生時代中期後葉と考えられる。

SD-09は、前回調査のSD-02に統くものと考えられる。SD-02では、溝内から古墳時代の須恵器が出土している。

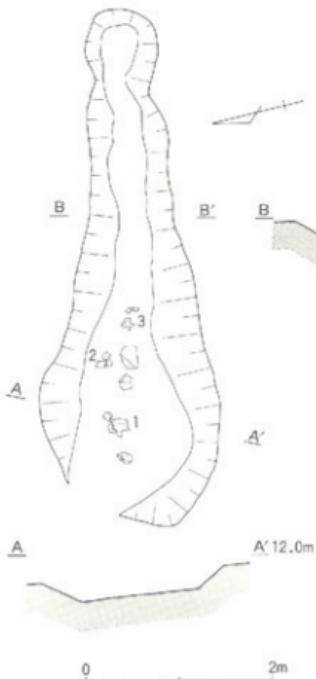
SD-10（第43図）

第I調査区の南西端に位置し、西向き斜面の10.5mの標高に沿うように平面形が弧状を呈している。南西端は、調査区域外となってしまっており調査不可能であった。溝の現存長9.2m、幅0.2~0.5m、深さ16~39cmを測る。溝底は、中央から両側端へ向けて下るようになっている。溝の覆土は、暗褐色土が入っている。

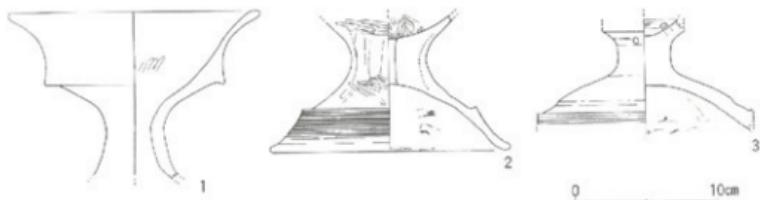
遺物は、弥生土器・甕（第42図1）が溝の中央部2.2mの範囲より出土している。鉢（2）は、溝の両側より出土している。

SD-10出土遺物（第42図1, 2）

甕（1）は、口縁部が内傾し、外面に4条の凹線を入れている。体部は、肩が良く



第38図 SD-06実測図



第39図 SD-06出土遺物実測図

張り出しており、底部へ向け細く、しほむ形となっている。口縁外面はヨコナデ、体部外面上半にハケメ、下半にヘラミガキ、体部内面上半にハケメの後に下半にかけてヘラケズリを施している。体部外面の肩のあたりに、刷毛目原体による刺突文を周らせている。

台付鉢（2）は、高杯の杯部に台を付けたような形を呈している。口縁外面に2条の凹線を入れ、頸部から体部内面にかけて横方向のハケメを施し、体部外面にはヘラミガキ、台の内外面にナデを施している。

これらの弥生土器は、甕、鉢とも口縁部に凹線を入れてある。甕の器形は、口縁部が内傾し、体部の肩が良く張り出した形を取ることと、体部内面下半にヘラケズリを施しており、弥生時代中期後葉のものと考えられる。

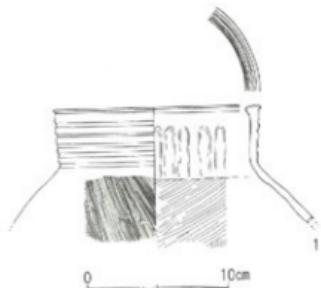
SD-11（第44図）

第Ⅱ調査区の西側、丘陵斜面に直向するように位置する。溝は、長さ4.5m程度張り出しており、上縁幅2.1m、底の幅0.9mを測る。溝の底は、平坦に削られ、断面が台形を呈している。

溝の覆土は、最下層に黄色土（地山ブロック）が厚さ50cmで堆積し、その上層には暗褐色土と褐色土が10cm位の厚さで互層をなしている。互層をなしている土は、固くしまっており、溝の上部でも厚さ80



第40図 SD-09実測図



第41図 SD-09出土遺物実測図

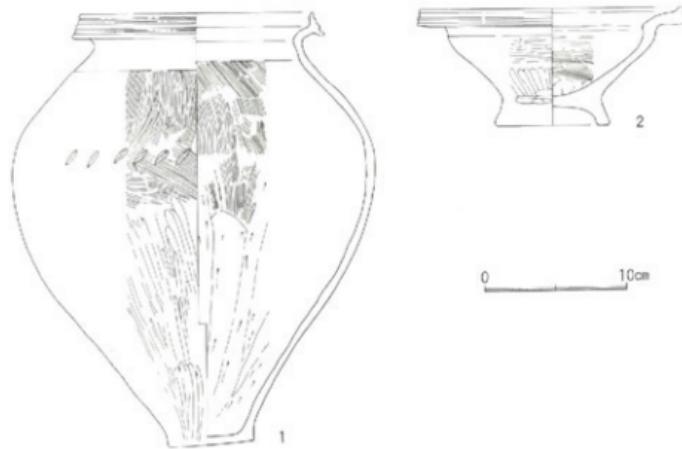
cm、長さ9mにわたって堆積している。これは、溝の南側の谷を堤防状に土が盛られていることから、堤の土手と思われる。

この溝は、前回調査のSD-08に続くものであり、両者を繋いだ長さ9.5mを測る。溝は東端で途切れている。西端も調査区域外では谷部となっており、推定する溝の長さ10m程と思われる。この溝は、調査区域外の西側谷部を東西に横断する堤防を作る際に掘られたと思われる。溝を掘り、溝内に地山、黒色土、褐色土を互層に築き固めながら盛り上げ、堤防と地面の繋

がりを強固にしたものと思われる。遺物は溝内から出土していない。

SK-01（第46図）

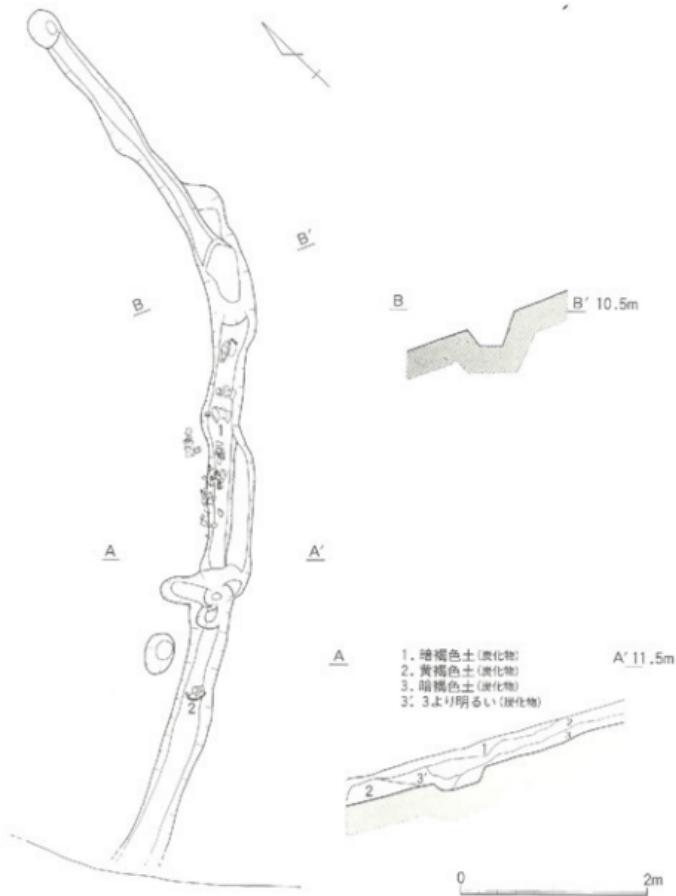
第Ⅱ調査区の中央部、SD-07と切り合って位置している。新旧関係は、SD-07（古）、SK-03（新）である。土壤は、平面形が長方形を呈し、主軸方向を東西に向いている。長辺2.6m、短辺1.3m、深さ0.2mを測る。覆土は、暗褐色土が入っていた。遺物は、土壤の北西コーナーの覆土中より須恵器、蓋坏・身（第45図1）が出土している。



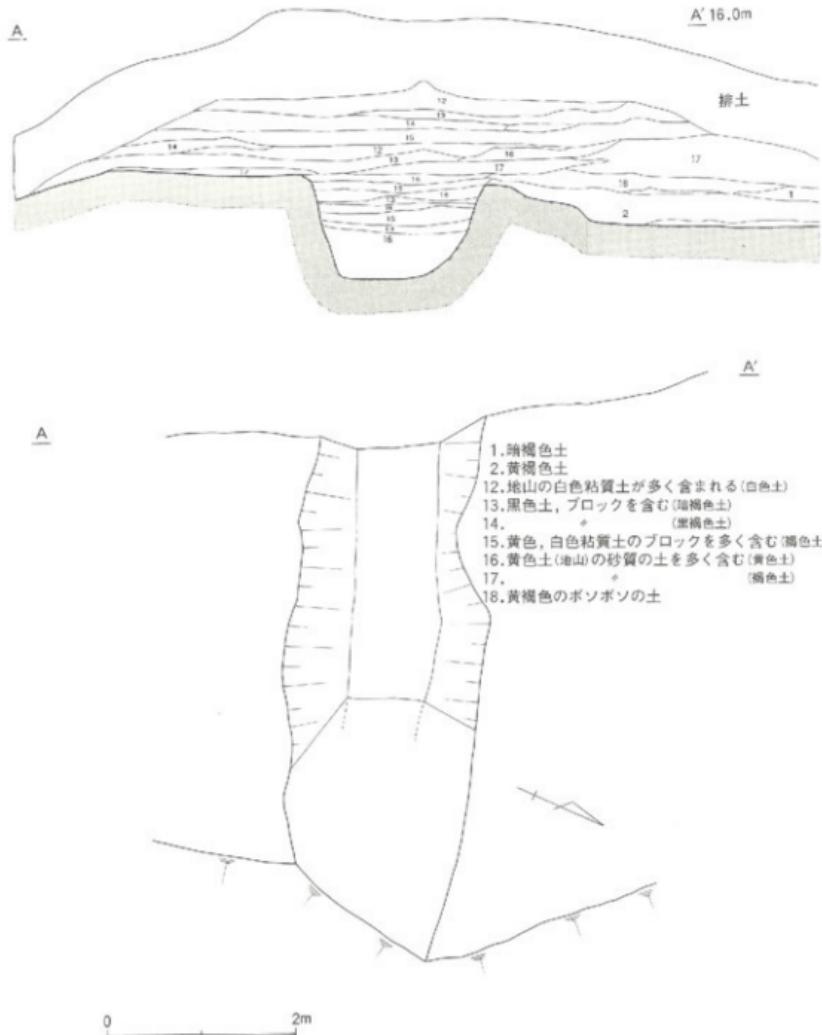
第42図 SD-10出土遺物実測図

SK-01出土遺物（第45図1） 壺・身で、底部に丸味を有し、受部が外方へ伸び、立ち上りは内傾している。口唇部に明瞭な段を有している。

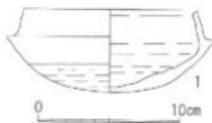
この壺・身は、立ち上りがやや長く、口唇部に段を有していることより、山陰須恵器編年のⅡ期に当たるものと思われる。



第43図 SD-10実測図



第44図 SD-11実測図

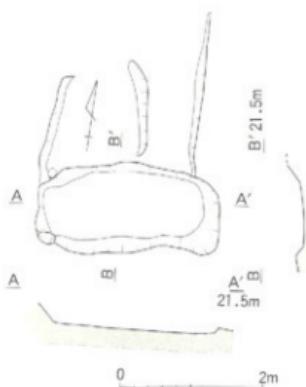


第45図 SK-01出土遺物実測図

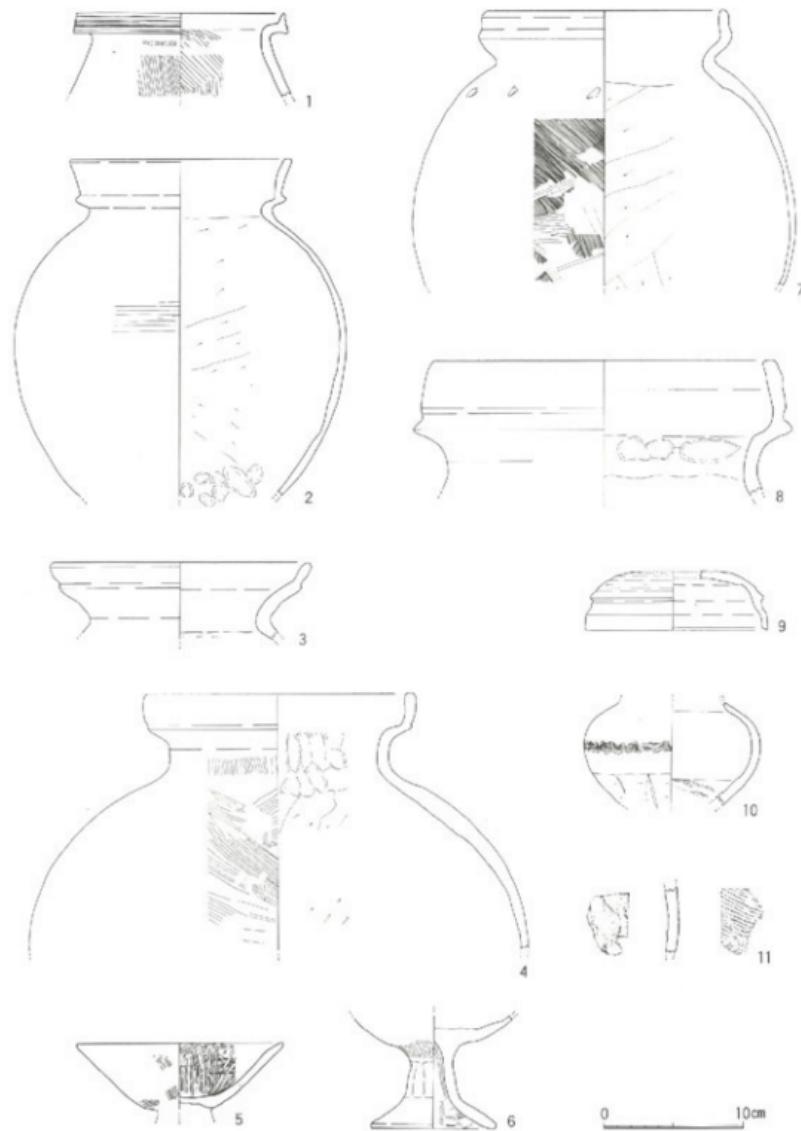
第I調査区出土遺物（第47、48、49図）

第47図1は、弥生土器、甕でE-1区第3層から出土している。口縁外面に凹線を入れ、体部外面にハケメを施している。時期は、弥生時代中期後葉と考えられる。2,8は、古墳時代前期の甕と壺である。2は、複合口縁の上端に平坦面を有し、口径15.2cmを測る。8は、大形の壺で口径24.4cmを測る。两者ともF-2区、第3層からの出土である。3～7は、古墳時代中期と思われる土器である。3は二重口縁の甕で、口縁部の器壁が厚く、頸部の長いものである。E-2区、第3層から出土している。4は、二重口縁の壺で、口縁部は直立し、上端部に平坦面を有し、下端の突出も丸味を持つ、全体的に器壁の厚いものである。F-2区、第3層から出土している。5,6は高坏で、E-1、第3層から出土している。3は、脚部が欠損している。坏部内面は、ハケメの後ヘラミガキを施している。6は、脚部から坏部下半にかけての破片である。脚部の途中が折曲し、坏部に丸味を有するものである。7は、二重口縁の甕である。口縁部上端に丸味を有し、下端部も丸味を持ち折曲している。器壁にかなり厚みを持つ。体部上半に刺突があり、外面にハケメを施している。口径17.6cmを測る。F-1、第3層からの出土である。9は、須恵器、坏・蓋である。天井外面に回転ヘラケズリを施し、天井部と口縁部の境に稜を有している。口唇部に段を有している。この須恵器は、山陰須恵器編年のⅠ期と思われる。F-1区、第3層からの出土である。10は、須恵器の体部である。肩部外面に櫛描波状文を入れ、下半部を手持ちヘラケズリを行っている。内面は、下半に同心円叩きの跡が残るがヨコナデを施している。外面の色調は、暗灰色で、断面はあざき色を呈している。F-1区、第3層から出土している。11は、須恵器、甕で、外面に平行叩き、内面は叩きがナデ消されている。E-1区、第3層から出土している。10,11は、初期須恵器と考えられる。

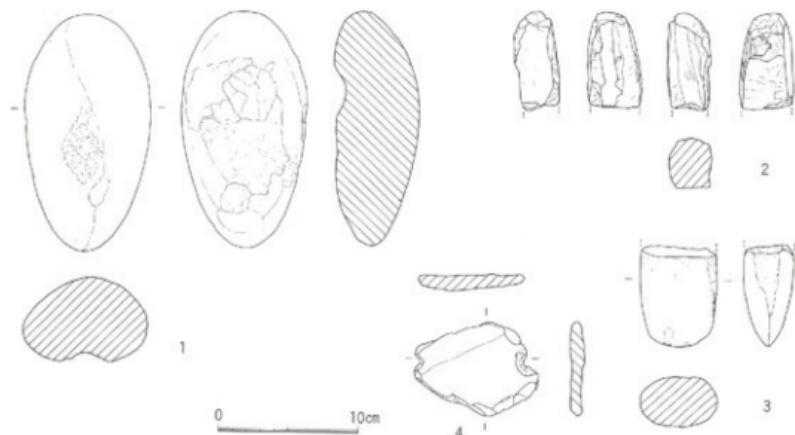
第48図1は、蔽石であり、石の平坦な方が使用により大きく凹んでいる。重量900gを測る。拡張区の第3層から出土している。2は、砥石であり、全面が使用されている。重量110.6gを測る。E-2区、第3層から出土している。3は、磨製石斧の刃部の破片である。幅5.5cm、厚み3.6cm,



第46図 SK-01実測図



第47図 F1, E1・2出土遺物実測図



第48図 第1調査区出土遺物実測図

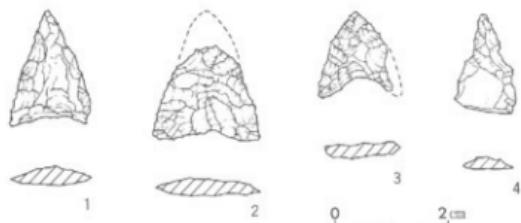
重量194.5gを測る。E-1区、
第2層から出土している。4は、
表採品の石錐である。扁平な河
原石の両端を打ち欠いている。

重量69.43gを測る。

第49図1～4は、石鏃である。

1がサスカイト製、他は黒曜石
製である。1は、B-0、第2

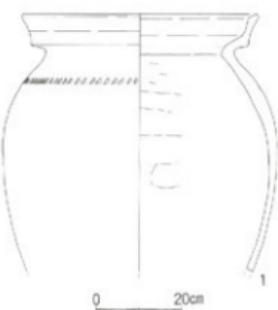
層から出土。2は、E-0、1区から出土。3は、E-1区、
第3層から出土。4は、F-1区、第3層から出土している。
I区の第3層は、住居跡を覆っていた土層である。



第49図 第1調査区出土遺物実測図

第Ⅲ調査区（第51図）

標高29mを測る尾根とその北側斜面に位置している。北側
斜面は傾斜がかなり急なものであり、遺構は検出していない。
尾根上から南東斜面にかけては緩斜面となっており、ピット
を14穴検出している。このピットは、柱穴等の明瞭なもので
はなかった。遺物は、弥生土器・甕（第51図1）が出土している。



第50図 第Ⅲ調査区出土遺物実測図

弥生土器の甕で、複合口縁を呈し、体部の肩はあまり張り出していない。全体に器壁が厚く、胎土に砂粒を多く含む。口縁内外面にヨコナデ、体部外面もナデている。時期は、弥生時代後期後半と思われる。



第51図 第Ⅲ調査区全体図

V 小 結

勝負遺跡では、I・II区の丘陵斜面において、弥生時代の住居跡5、溝5、古墳時代の住居跡13、土壙1、時期不明のピット群を検出している。

I・II区の各遺跡は、以下の時期である。

住居跡	弥生時代後期前半	SI-01
	〃 後期後半	SI-02, 03, 12, 14
	古墳時代中期	SI-04, 05, 06, 07, 08, 09, 10, 11, 13, 15, 16, 17, 18
溝	弥生時代中期後葉	SD-10
	〃 後期後半	SD-04, 06, 07, 08
土 壤	古墳時代後期	SK-01

住居跡は、弥生時代後期から古墳時代中期にかけてのものである。住居跡の平面プランは、弥生時代後期前半のSI-01が隅丸方形、後期後半のSI-12, 14が隅丸方形、SI-02, 03が多角形を呈している。古墳時代には、中期前半のSI-05, 06, 08が隅丸方形で、中期中頃のSI-10, 15, 18が隅丸方形、SI-17, 16, 17が方形を呈している。勝負遺跡の西側に位置する石台遺跡において、^(国1)弥生時代後期初頭の円形プランの住居跡(SI-01)が検出されている。勝負遺跡のSI-01は、円形プランから隅丸方形へと変化した時期のものと思われ、各隅が円形に近い形態である。弥生時代後期後半に一時に多角形プランが出現するが、古墳時代に入り中期前半はSI-08のように隅丸方形を呈している。中期中頃になり方形プランに変化するようであるが、一部隅丸方形プランの住居跡も混在する。

弥生時代の住居跡SI-01, 02, 12, 14は、丘陵上部側に溝を周らせており、前回調査のSI-03, 04(昭和56年調査)^(国2)も溝が付属していた。この溝は、住居跡の丘陵上部側に掘られることにより排水溝としての用途が考えられているが、丘陵側の中央部が途切れることにより、この部分が入口となっていたとも考えられる。SI-14では、溝の途切れた部分と住居跡との間にピットが掘られ、この底面が階段状に削られ、住居跡の壁もテラス状に削り出している。住居跡をめぐる溝は、松江市竹矢町長嶺遺跡SI-01、東出雲町寺床遺跡SI-02において確認され、两者とも溝は途切れている。時期は、弥生時代中期後葉で、勝負遺跡より古い段階から見られるようである。

弥生時代の住居跡には、いずれも中央ピットが掘られていた。中央ピットに溝が付属するものとして、SI-01, 14がある。SI-01は、中央ピットと付属の溝に焼土、炭化物が多く入っており、火の使用に伴うものと思われる。SI-01は、焼失住居であるが中央ピットの上に焼土が厚く堆積して

おり、この部分を中心に焼けている。また、この住居跡からは、楕円形土器（第5図1）が出土している。中央ピットは、炉として機能していたと考えられ、楕円形土器は炉の上部構造として、吊り下げられていた可能性もある。

古墳時代の住居跡は、中期前半のSI-08が隅丸方形プランで主柱穴が2本という構造である。中期中頃のSI-07が方形プランで推定6本柱である。この時期になると、その他の住居跡は主柱穴の明確なものが少なく、主柱穴を持たないものが多くなる。松江市乃木福富町・大角山遺跡において、中期の住居跡が検出されており、方形プランの住居跡で主柱穴が2本のものと、無柱のものが検出されている。

出土遺物は、SD-10出土の甕（第42図1）が、口縁に凹線文を入れ、体部内面下半にヘラケズリを施すもので、弥生時代中期後葉の資料として全形の窪る良好な資料である。SI-01出土の楕円形土器は山陰型甕とされる初期の段階（後期前半）のものである。県内では、この時期の甕出土例は無く、島根県の鳥取県会見町天王原遺跡において確認されている。また、古墳時代の住居跡SI-08からは、在地の二重口縁の甕、小形丸底甕、高杯、畿内布留系の甕、単純口縁の甕がセットで出土しており、須恵器が出現する以前の中前期前半の良好な資料である。

勝負遺跡からは、弥生時代の石器出土数が少なく、住居跡から敲石、砥石が出土する程度である。西隣りの石台遺跡^(注7)は、弥生時代前期、中期、後期を通して続いた遺跡で、特に住居跡は中期後半～後期初頭のものであり、石器出土数も多く、石斧、石包丁が出土している。勝負遺跡は、住居跡の時期が後期前半以降ということで石器数が減少しているようである。

集落遺跡として勝負遺跡を考える上で、西側へ100mの丘陵上に位置する石台遺跡とは不可分の関係にあったと思われ、大きな集落単位として捉えるべきと思われる。集落の時期は、石台遺跡が、弥生時代前期以降、中期から後期初頭を中心として住居が造られ、それ以降は勝負遺跡において弥生時代後期前半から古墳時代中期まで住居が確認されている。島根県東部においては、この遺跡以外に継続的集落の調査例はなく、今回の調査は今後の集落研究の基礎資料となるものである。

註

- 1) 「石台遺跡」『国道9号線バイパス予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅶ 島根県教育委員会 1989年
- 2) 「勝負遺跡」『国道9号線バイパス予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』IV 島根県教育委員会 1983年
- 3) 「長嶺遺跡」『中竹矢後1号墳、長嶺遺跡』松江市教育委員会 1986年
- 4) 『寺田遺跡調査概報』 東出雲町教育委員会 1983年
- 5) 『大角山遺跡発掘調査報告書』 島根県教育委員会 1988年
- 6) 米田文雄「山陰型楕円形土器の再検討—分布とその機能を中心に—」『関西大学考古学研究紀要4』 関西大学考古学研究室 1984年
- 7) 註1と同じ



第52図 勝負遺跡遺構全体図(昭和56年度、平成元年度調査遺構全体図)

図 版



勝負遺跡遠景(北東より)



第1調査区上層遺構(北西より)

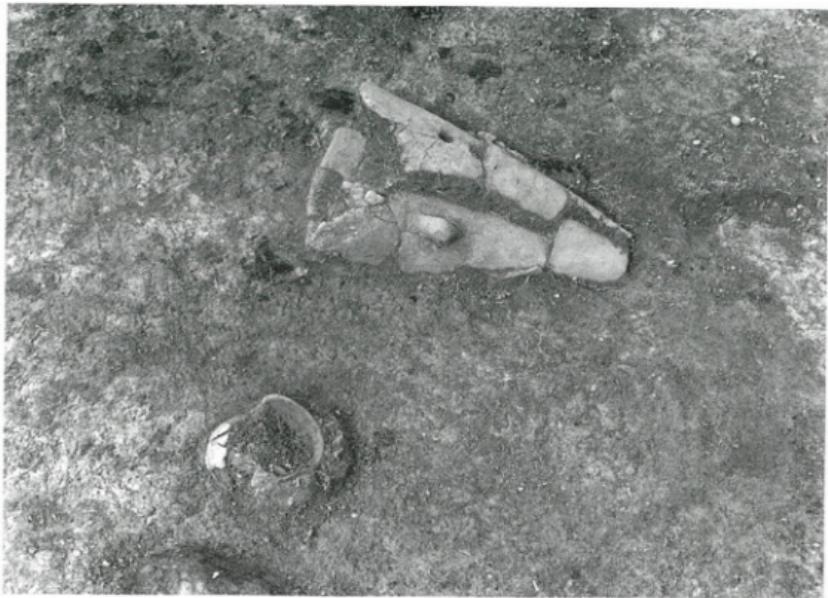
図版 2



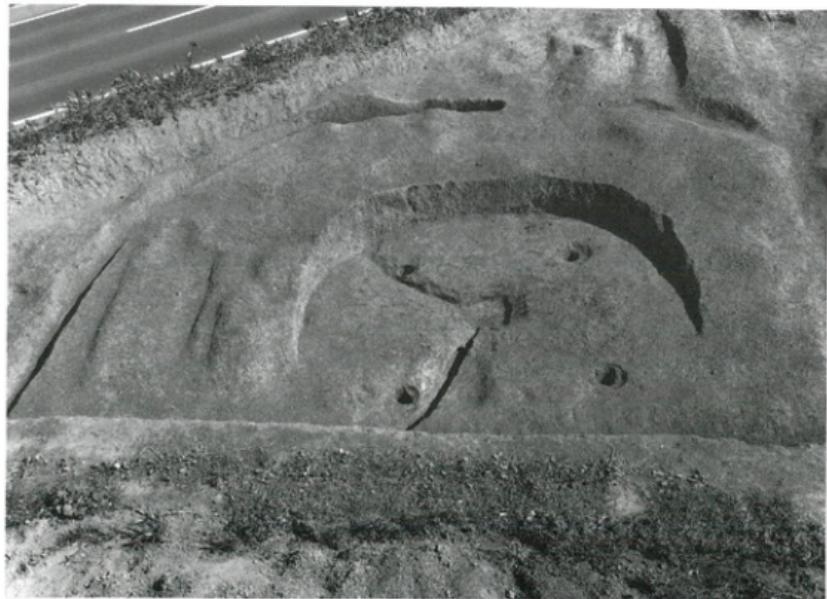
I 区全景(南東より)



SI-01焼土検出状況(北西より)



SI-01遺物出土状況



SI-01全景(西より)

図版4



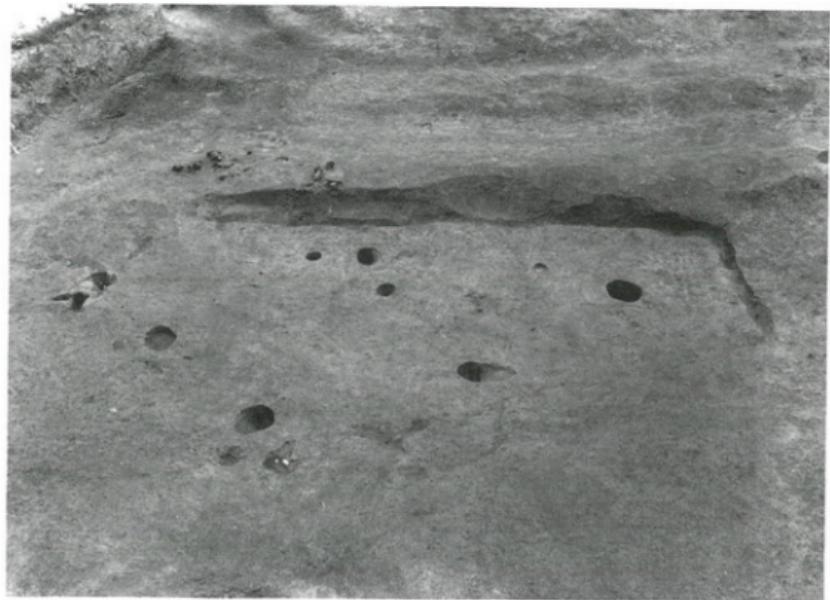
SI-02(右)、03(左)、全景(北より)



SI-02全景(北より)

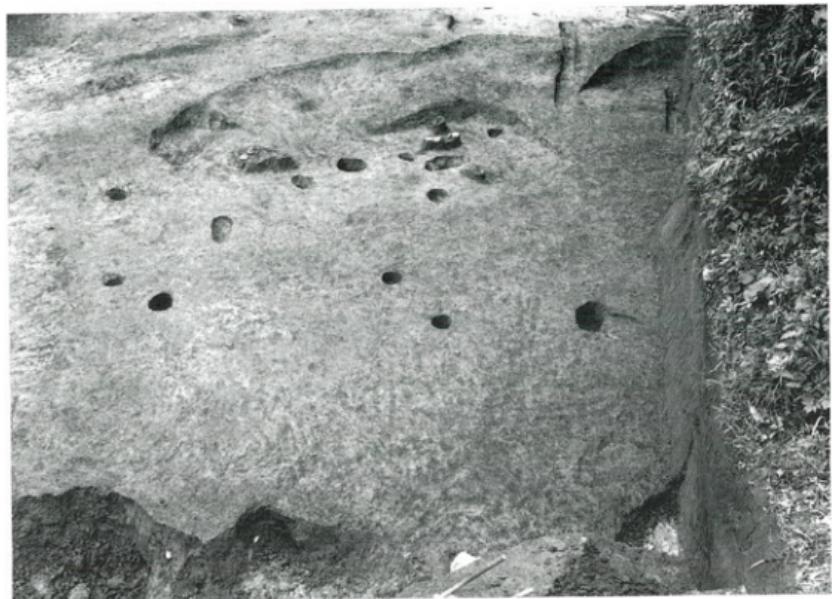


SI-03全景(北より)



SI-04全景(西より)

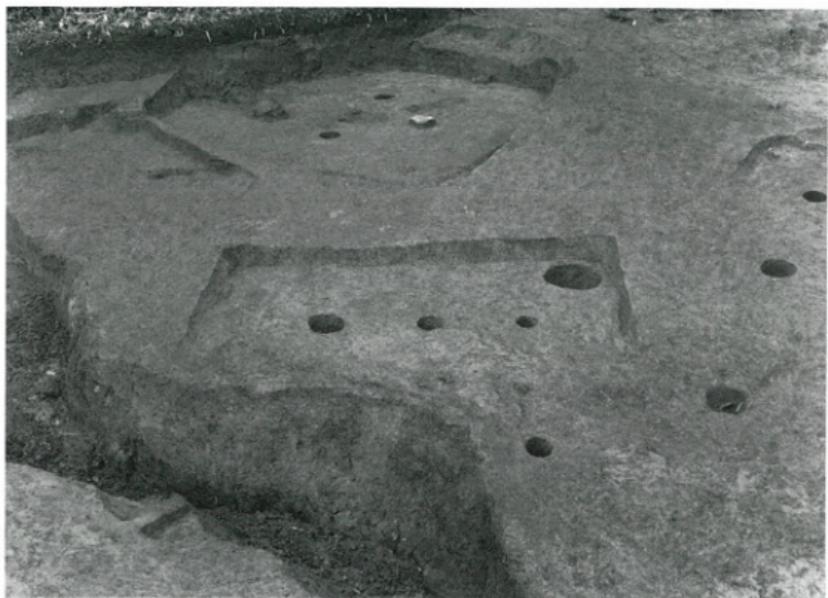
図版 6



SI-05、06全景(西より)



SI-06全景(北東より)



SI-07(手前)、SI-08(奥)(北東より)



SI-07遺物出土状況

図版 8



SI-08全景(東より)



SI-08遺物出土状況



SI-10、11全景(東より)

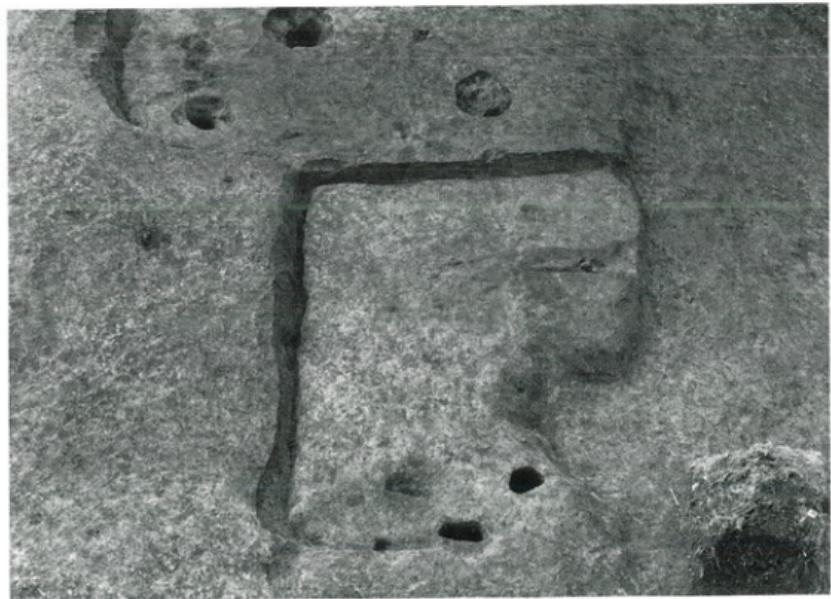


II区全景(南東より)

図版10



SI-12全景(北より)



SI-13全景(北より)



SI-14全景(北より)



SI-15全景(北東より)

図版12



SI-16全景(北より)



SI-17全景(北より)



SI-18全景(東より)



SI-01、02(昭和56年調査)全景

図版14



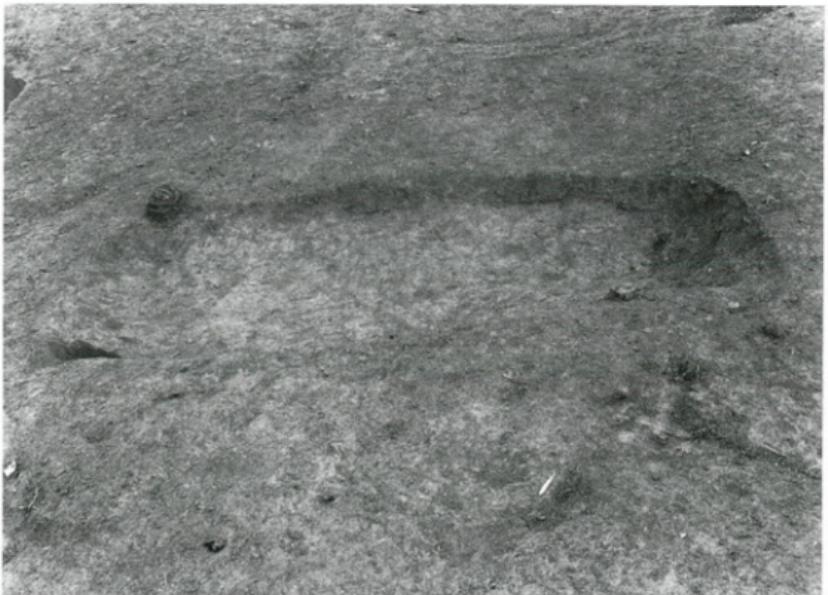
SD-06全景(東より)



SD-10全景(南西より)



SD-11土層堆積状況(東より)



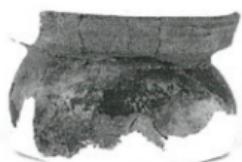
SK-01全景(北より)



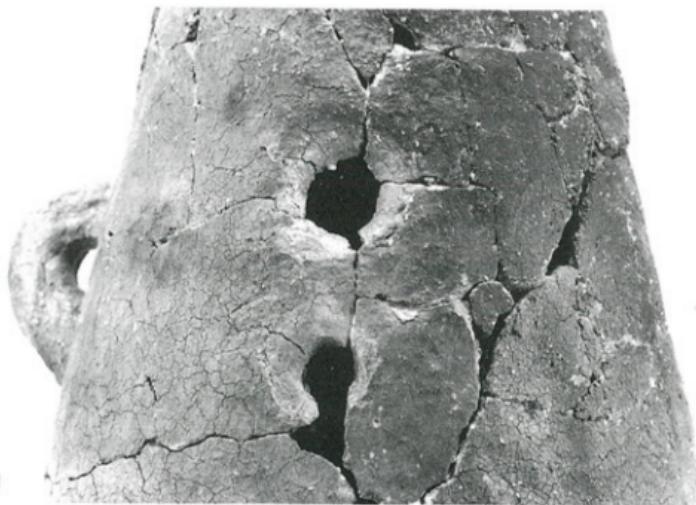
第Ⅲ調査区(北西より)



第Ⅲ調査区(南より)



5-1



SI-01出土遺物

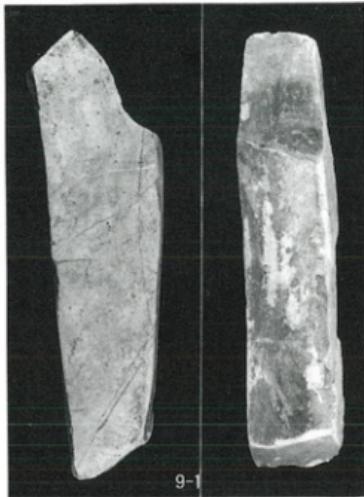
図版18



7-1



9-2



9-1



9-3



12-1



2



3



4



5

SI-02.03.05出土遺物



14-1



2



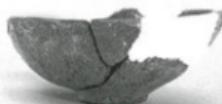
4



3



16-1



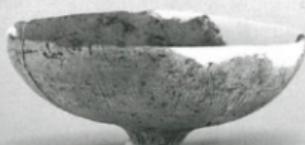
16-3



2



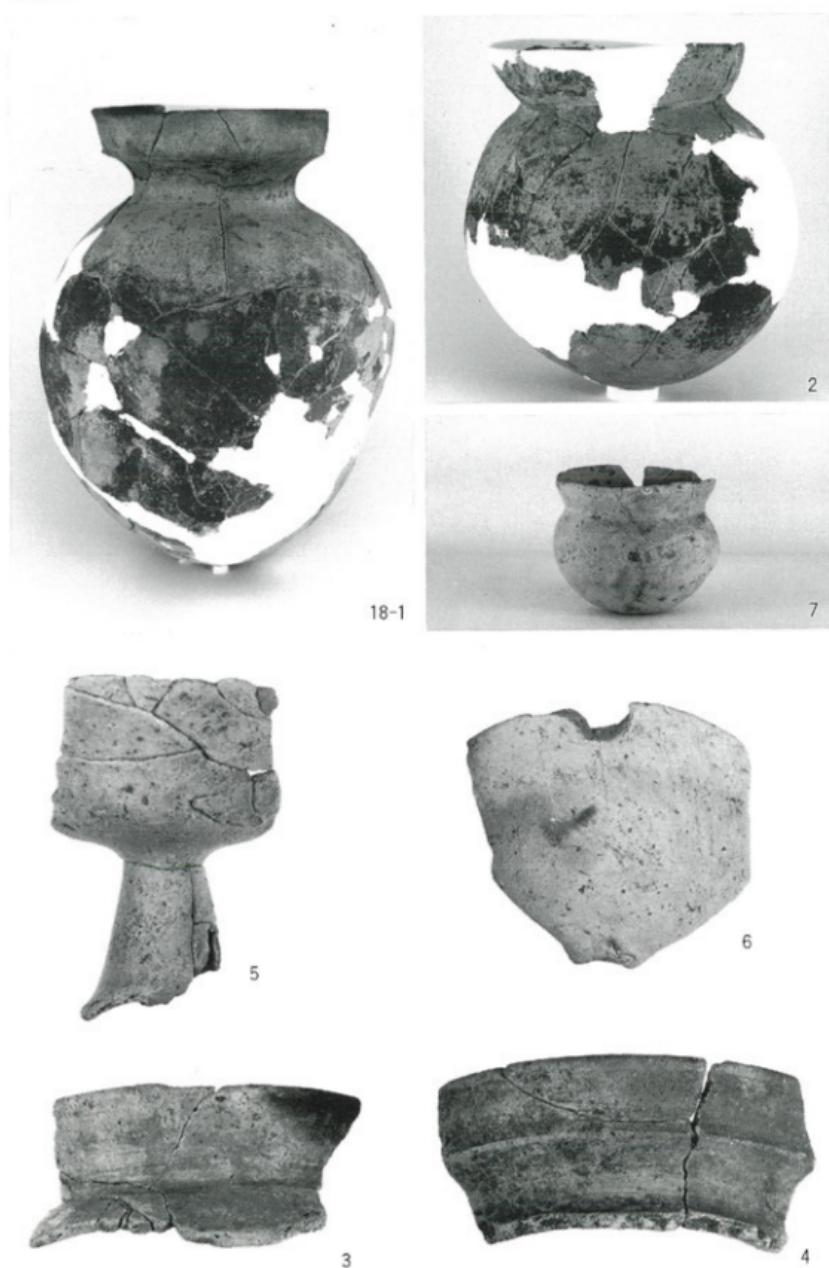
5



4



6



SI-08出土遗物



19-1



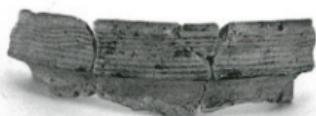
22-1



22-2



26-1



2



3



6



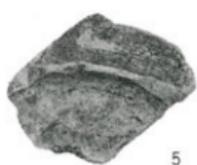
9



4



8



5



7



27-2

27-1



30-1



30-2



32-1



2



3



34-1



34-2



35-1



2



3

SI-17、18、SD-01出土遺物

図版24



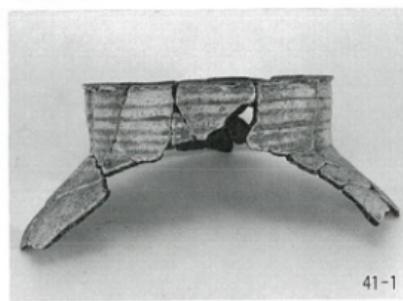
39-1



39-3



39-2



41-1



42-2



42-1



SK-01、I区出土遺物



47-10



9



11



49-1



2



3



4



48-1



4



2



3



50-1

I区、III区出土遺物

一般国道9号松江道路建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書IX
(勝負遺跡)

1992.3

発行 建設省松江国道工事事務所
島根県教育委員会
印刷 有限会社谷口印刷

